

君の名は。

挿絵 ちーこ 作 新海 誠



君きみの名なは。

新しん海かい 誠まこと・作

ちーこ・挿絵

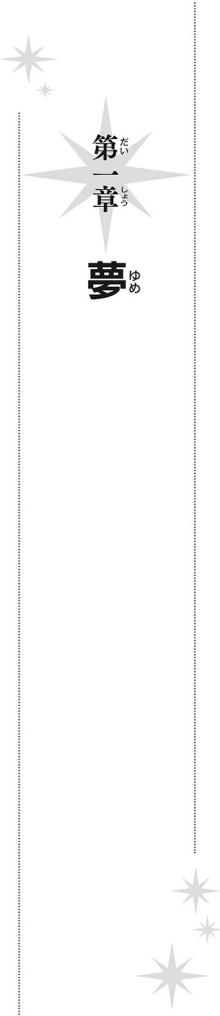


〈保護者のみなさまへ〉

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載したりすることを本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。本作品の内容は、底本発行時の取材・執筆内容に基づきます。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。



懐なつかしい声こえと匂におい、愛いとおしい光ひかりと温おん度ど。

私わたしは大たい切せつなだれかと隙すき間まなくぴったりとくっついている。分わかちがたく結むすびふと、目めが開ひらく。

天てん井じょう。

部へ屋や、朝あさ。

ひとり。

東とう京きょう。

——そうか。

夢ゆめを見みていたんだ。私わたしはベッドから身みを起おこす。

そのたった二秒びょうほどの間あいだに、さっきまで私わたしを包つつんでいたあたたかな一いっ体たい朝あさ、目めが覚さめるとなぜか泣ないでいる。こういうことが私わたしには、時とき々どきある。

そして、見みていたはずの夢ゆめは、いつも思おもい出だせない。

俺おれは涙なみだをぬぐった右みぎ手てを、じっと見みる。人ひと差さし指ゆびにのった小ちいさな水すとても大たい切せつなものが、かつて。

この手てに。

——分わからない。

俺おれはあきらめてベッドから降おり、部へ屋やを出でて洗せん面めん所じょに向むかう。顔かおを洗あどこか不ふ満まんげな顔かおが、俺おれを見み返かえしている。

私わたしは鏡かがみを見みつめながら髪かみを結ゆう。春はる物もののスーツに袖そでを通とおす。

俺おれはようやく結むすび慣なれてきたネクタイを締しめ、スーツを着きる。

私わたしはアパートのドアを開あけ、

俺おれはマンションのドアを閉しめる。目めの前まえには、

ようやく見み慣なれてきた、東とう京きょうの風ふう景けいが私わたしの前まえに広ひろがっている。か

俺おれは混こみ合あった駅えきの改かい札さつを抜ぬけ、エスカレーターを降おり、

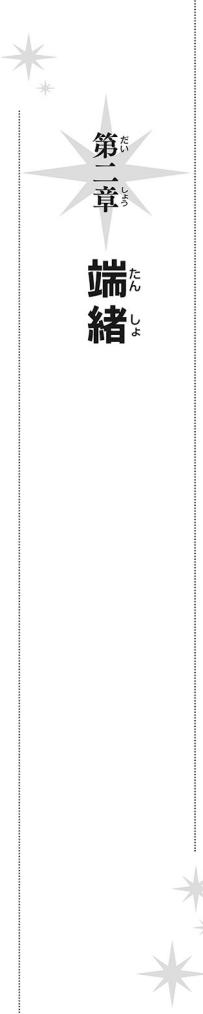
通つう勤きん電でん車しゃに、私わたしは乗のる。ドアに寄よりかかり、流ながれていく風ふう景けいを

ほんやりとした花はな曇ぐもりの白しろい空そら。百人にんが乗のった車しゃ輛りょう、千人にんを運は

気きづけばいつものように、その街まちを眺ながめながら

俺 おれ は、 私は、 わたし

だれかひとりを、ひとりだけを、探さがしている。



知しらないベルの音おとだ。

まどろみの中なかでそう思おもった。目め覚ざまし？ でも、俺おれはまだ眠ねむいのだ。昨さく夜やは
「.....くん。.....たきくん」

今こん度どは、誰だれかに名なを呼よばれている。女おんなの声こえ。……女おんな?

「たきくん、瀧たきくん」

泣なき出だしそうに切せつ実じつな声こえだ。遠とおい星ほしの瞬またきのような、寂さみしげに震ふ
「覚おぼえて、ない?」

その声こえが不ふ安あんげに俺おれに問とう。でも、俺おれはお前まえなんて知しらない。

突とつ然ぜん電でん車しゃが止とまり、ドアが開ひらく。そうだ、電でん車しゃに乗のっていたんだ。そ
「名な前まえは、みつは!」

少しょう女じょはそう叫さけび、髪かみを結ゆっていた紐ひもをするりとほどき、差さし出だす。俺おれ

そこで、目めが覚さめた。

少しょう女じょの声こえ、その残ざん響きょうが、まだうっすらと鼓こ膜まくに残のこっている。

……名な前まえは、みつは?

知しらない名なで、知しらない女おんなだった。なんだかすごく必ひっ死だった。涙なみだがこぼれる
でもまあ、ただの夢ゆめだ。意い味みなんかない。気きづけばもう、どんな顔かおだったかも思おもい出
それでも。

それでも、俺おれの鼓こ動どうはまだ、異い常じょうに高たか鳴なっている。奇き妙みょうに胸むねが重
す一つ。

「……?」

風邪かぜか? 鼻はなど喉のどに違ひ和わ感かんがある。空くう気きの通とおり道みちが、いつもよりも
そこには胸むねの谷たに間まがある。

「……?」

そのふくらみに朝あさ日ひが反はん射しゃし、白しろい肌はだが滑なめらかに光ひかっている。ふたつの
触さわってみるか。

俺おれはすとんとそう思おもう。りんごが地ち上じょうに落おちるみたいにほとんど普ふ遍へん的てきに

.....。

.....。

.....?

...!

俺おれは感かん動どうしてしまう。おおお、と思おもう。なんなんだこれは。これってなんというか.....?

「.....お姉ねえちゃん、なにしとるの?」

ふと声こえの方ほう向こうを見みると、小ちいさな女おんなの子こが襖ふすまを開あけて立たっていた。

「いや、 すげえリアルだなあって……。え？」

あらためて少しょう女じょを見る。まだ十歳さいくらいか、ツインテールでツリ目めがちの、生なま意
「……お姉ねえちゃん？」



俺おれは自じ分ぶんを指ゆびさし、その子こに問とう。ということは、こいつは俺おれの妹いもうとか？

「なに寝ねぼけとんの？ ご・は・ん！ 早はやく来きない！」

びしゃり！ と叩たたきつけるように襖ふすまを閉しめられる。なんか凶きょう暴ぼうそうな女じょ児じ寝ね癖ぐせでところどころ飛とび跳はねた、黒くろく長ながい水すい流りゅうみたいな髪かみ。小ちいさ
まだ俺おれは生なまで見みたことはないけれど、これは間ま違ちがいなく、女おんなの体からだだ。

.....女おんな?

俺おれが、女おんな?

突とつ然ぜんに、それまでぼんやりと体からだを覆おおっていたまどろみが晴はれわたる。頭あたまが一
そしてたまらずに、俺おれは叫さけんだ。

* * *

「お姉ねえちゃん、おーそーいー！」

引ひき戸どを開あけて居い間まに入はいると、四よつ葉はの攻こう撃げき的てきな声こわ色いろが飛とん
「明日あしたは私わたしが作つくるでね！」

ごめんの代かわりに私わたしはそう言いう。この子こはまだ乳にゅう歯しも全ぜん部ぶ生はえ替かわって
「いただきまーす」

つるりとした目め玉だま焼やきにソースをたっぷりかけて、ご飯はんと一緒に緒しょに口くちに入いれる
「.....今日きょうは、普ふ通つうやなあ」

「え？」

気きづけばお祖母ばあちゃんが、ご飯はんを嘴かむ私わたしをじっと見みている。

「昨日きのうはヤバかったもんなあ！」

と、四よつ葉はもにやにやと私わたしを見みる。

「突とつ然ぜん悲ひ鳴めいあげたりしてな」

悲ひ鳴めい? 怪あやしげなものを検けん分ぶんするようなお祖母ばあちゃんの視し線せんに、ばかにし
「え、なになに? なんなんよ!?’

なんのよ、二人ふたりそろって感かんじ悪わるい——

ピンポンパンポーン。

突とつ如じょ暴ぼう力りょく的てきな音おん量りょうで、鴨かも居いに設せつ置ちされたスピーカーが鳴
『みなさま、おはようございます』

その声こえは、親しん友ゆうのサヤちんのお姉ねえさん（町まち役やく場ば・地ち域いき生せい活かつ情
『糸いと守もり町まちから、朝あさのお知しらせです』

スピーカーから流ながれる言こと葉ばは、いともりまち・から・あさの・おしらせです、と文ぶん節せつ
毎まい日にち朝あさ夕ゆう二回かい、かかさず町まち中じゅうに流ながされる防ぼう災さい無む線せん放

『来らい月げつ二は十つ日かに行おこなわれる、糸いと守もり町まち町ちょう長ちょう選せん挙きょについて。』

鴨かも居いのスピーカーが沈ちん黙もくする。スピーカー本ほん体たいには手てが届とどかない故ゆえに『千二百年ねんに一度どという彗すい星せいの来らい訪ほうが、いよいよひと月つき後ごに迫せまっていま』画が面めんには『ティアマト彗すい星せい、一ヶ月げつ後ごに肉にく眼がんでも』の文も字じと、ぼやけ「……いいかげん、仲なか直なおりしないよ？」

唐とう突とつに、四よつ葉はが空くう気きを読よまない発はつ言げんをする。

「大人おとなの問もん題だい！」

ぴしゃりと、私わたしは言いう。そう、これは大人おとなの問もん題だいなのだ。なにが町ちょう長ちよ

いってきまーす、と声こえを揃そろえてお祖母ばあちゃんに告つげて、私わたしと四よつ葉はは玄げん関盛せい大だいに、夏なつの山やま鳥どりが鳴ないでいる。

斜しゃ面めん沿ぞいの狭せまいアスファルトを下くだり、いくつかの石いし垣がきの階かい段だんを降お
「み一つはー！」

と背せ中なかに声こえをかけられたのは、小しょう学がっ校こうの前まえで四よつ葉はと別わかれた後あ
「あんたたち、仲なかいいなあ」

「良よくないわ！」

と二人ふたりがハモる。その真しん剣けんな呑ひ定ていっぷりがおかしくて、私わたしはくすぐすと笑わ
「三みつ葉は、今日きょうは髪かみ、ちゃんとしとるな」

自じ転てん車しゃから降おりたサヤちんが、私わたしの髪かみ紐ひものあたりを触さわりながらにやにや
「え、髪かみ？　なに？」

そういうば、朝ちよう食しょくの時ときにうやむやになった会かい話わを私わたしは思おもい出だす。今
「そうや、ちゃんと祖母ばあちゃんにお祓はらいしてもらったんか？」

とテッシーが心しん配ぱい顔がおを乗のりだした。

「オハライ？」

「ありやゼッタイ狐きつね憑つきやぜ！」

「はああ？」唐とう突とつな言こと葉ばに私わたしは顔かおをしかめる。サヤちんが呆あきれたように代だ
「あんたはもう、なんでもオカルトにしんの！　きっと三みつ葉ははストレス溜たまっとるんよ。なあ？」

ストレス？

「え、ちょ、ちょっと、なんの話はなし？」

どうして皆みなにそろって心しん配ぱいされてるの、私わたし？ 昨日きのうは……とっさには思おもひ

——あれ？

本ほん当とうに、そうだった？ 昨日きのう、私わたしは……

『——そしてなによりも！』

拡かく声せい器きの野の太ぶとい声こえが、私わたしの疑ぎ問もんを消けし去さった。

ビニールハウスの建たち並ならんだ向むかい側がわ、町ちょう嘗えい駐ちゅう車しゃ場じょうの無む駄だ



『なによりも、集しゅう落らく再さい生せい事じ業ぎょうの継けい続ぞく、そのための町まちの財ざい政せ
その高こう圧あつ的てきなほど堂どうに入いった演えん説ぜつは、なんだかテレビで見みる政せい治じ家
「おう、宮みや水みず」

「……おはよう」

最さい悪あく。私わたしに声こえをかけてきたのは、苦にが手てなクラスメイト三人にん組ぐみだ。高こ
「町ちょう長ちょうと土ど建けん屋やは」と一人ひとりが言いって、わざとらしく、演えん説ぜつ中ちゅう
「その子こどもたちも癒ゆ着ちゃくしとるな。それ、親おやの言いいついでつるんどるの？」

ばかみたい。私わたしは返へん事じをせず、足あしを速はやめてその場ばを去さろうとする。テッシーも
「三みつ葉は！」

突とつ然ぜん、大おお声ごえが響ひびいた。ひとつ、息いきが止とまりそうになる。信しんじられない。
「三みつ葉は、胸むね張はって歩あるかんか！」

私わたしは真まっ赤かになる。あまりの理り不ふ尽じんに、涙なみだまで流ながしてしまいそうになる。
最さい悪あく。

さっきまで鳴なっていたBGMは、いつの間にか消きえている。BGMなしのこの町まちは、ただただ

カッカッカッ、と黒こく板ばんが音おとをたてて、短たん歌からしきモノが書かきつけられる。

誰たそ彼かれと われをな問とひそ 九なが月つきの 露つゆに濡ぬれつつ 君きみ待まつわれそ

「誰たそ彼かれ、これが黄昏たそがれ時どきの語ご源げんね。黄昏たそがれ時どきは分わかるでしょう？」
ユキちゃん先せん生せいの澄すんだ声こえがそう言いって、黒こく板ばんに大おおきく『誰たそ彼かれ』
「夕ゆう方がた、昼ひるでも夜よるでもない時じ間かん。人ひとの輪りん郭かくがぼやけて、彼かれが誰だ
ユキちゃん先せん生せいは、今こん度どは『彼かれ誰たそ』『彼かは誰たれ』と書かく。なんだそりゃ、
「はーい、センセイしつもーん。それって『カタワレ時どき』やないの？」

そう誰だれかが発はつ言げんし、そうだよ、と私わたしも思おもう。タソガレ時どきはもちろん分わかる
「それはこのあたりの方ほう言げんじゃない？ 糸いと守もりのお年とし寄よりには万まん葉よう言こと葉
ど田舎いなかやからなあ、と男だん子しが言いって、くすぐすと笑わらい声ごえが上あがる。確たしかに

お前まえは 誰だれだ？

.....え?

なにこれ? 周しゅう囲いの音おとが、見み覚おぼえのない筆ひつ跡せきに吸すい込こまれるみたいにし
「.....さん。次つぎ、宮みや水みずさん!」

「あ、はい!」

私わたしは慌あわてて立たち上あがる。九十八ページから読よんでくださいね、とユキちゃん先せん生せ
「宮みや水みずさん、今日きょうは自じ分ぶんの名な前まえ、覚おぼえてるのね」

そしてクラス中じゅうがどっと笑わらう。はああ? なんなのよこれ、どういうこと?

「.....覚おぼえとらんの?」

「.....うん」

「ほんとに?」

「うんってば」

そう答こたえて、ちゅーっとバナナジュースをすすった。ごくん。おいし。サヤさんは不ふ思し議ぎなモ

「.....だってあんた、昨日きのうは自じ分ぶんの机つくえもロッカーも忘わすれたって。髪かみはぼさぼさ

私わたしはその姿すがたを想そう像ぞうしてみる。.....え?

「ええええ! うそ、ほんと!?'

「なんか、昨日きのうの三みつ葉は、まるで記き憶おく喪そう失しつみたいやったよ」

私わたしは慌あわてて思おもい返かえしてみる。.....やっぱりおかしい。昨日きのうのことが思おもい出

あれは.....どこかの知しらない街まち?

鏡かがみに映うつった.....男おとこの子こ?

私わたしは記き憶おくをなんとか辿たどりうとする。ピーひょろろーと、茶ちゃ化かすようにトンビが鳴

「うーん.....なんか、ずっと変へんな夢ゆめを見みとったような気きがするんやけど.....あれは、別べつのヒ

「.....分わかった!」

突とつ然ぜんテッシーが大おお声ごえを上あげて、私わたしはびくっとしてしまう。読よみさしのオカル

「それって、前ぜん世せの記き憶おくや! いやそれは科か学がく的てきやないとオマエらは言いうやろう

「あんたは黙だまっとって」サヤさんがぴしりと叱しかりつけ、「あー、もしかしてあんたが私わたしのノ

「は? 落らく書がき?」

あ、いや、違ちがうか。テッシーはそういうツマラナイいたずらをするタイプじゃないし、動どう機きも

「あ、ううん。なんでもない」と私わたしは取とり消けす。

「は? なんだよ落らく書がきて。俺おれ疑うたがわれとる?」

「なんでもないってば」

「うわ、ひでえ三みつ葉は! サヤちん聞きいたか、冤えん罪ざいやエンザイ! 檢けん察さつ呼よんでく!」

「でも三みつ葉は、昨日きのうはマジでちょっとヘンやったよ」と、テッシーの訴うったえを華か麗れいに

「んー、おかしいなあ……ホントにストレスとかかなあ……」

私わたしもあらためて、ここまで数かず々かずの証しょう言げんについて考かんがえてみる。テッシー

「そうや、きっとストレス! 三みつ葉は、最さい近きんそういうのいっぱいあるにん!」

そうなのだ。町ちょう長ちょう選せんは言いうに及およばず、いよいよ今こん夜やに迫せまったあの儀ぎ

「あーもう、私わたししさっさと卒そつ業ぎょうして東とう京きょう行いきたいわあ。この町まち狭せますぎ

分わかる、とってもとってもよく分わかる! とサヤちんもうんうんうなづいてくれる。

「うちなんか母子おやこ姉妹しまい三連れん続ぞくで町ちょう内ない放ほう送そう担たん当とうだもん。近

「サヤちん、卒そつ業ぎょうしたら一いっ緒しょに出でよう東とう京きょうに! こんな町まち、大人おと

「ん?」テッシーはぼんやりとオカルト雑ざつ誌しから顔かおを上あげる。

「……あんた、話はなし聞きいとった?」

「あー……。俺おれは別べつに……普ふ通つうにずっと、この町まちで暮くらしてくんやと思おもうよ」

どはあああ、と私わたしとサヤちんは深ふかく溜ため息いきを吐はく。こんなだから女じょ子しにモテ

そよ、と吹ふいた風かぜの行ゆき先さきに目めをやると、眼がん下かの糸いと守もり湖こがいかにも無む

こんな町まち、本ほん屋やもないし歯は医い者しゃもないし。電でん車しゃは二時じ間かんに一本ぽんや

学がっ校こうからの帰かえり道みち、私わたしとサヤちんの対たい糸いと守もり町まち・愚ぐ痴ちりモー

マックもモスもなくせにスナックは二軒けんもあるし。雇こ用ようはないし、嫁よめは来こないし、日

ぬぼーっと自じ転てん車しゃを押おしながら黙だまってついてきていたテッシーが、ふいに苛いらついた

「お前まえらなあ!」

「……なによ」と不ふ機き嫌げんな私わたしたちに、ニヤリ、と不ぶ気き味みな笑えみを浮うかべるテッシ

「そんなことより、カフェにでも寄よってかんか」

「え……」「な……」「な……!」

「カフェえええ!?」と、私わたしたちは盛せいだいにハモった。

がっちゃん！　という金きん屬ぞく音おんが、ひぐらしの声こわ色いろに溶とけていく。ほらよ、とテツ
そのカフェは、あのカフェではなかった。つまりスタバとかタリーズとか、あるいはこの世よのどこかに
「じゃ、私わたし先さきに帰かえるね」

今日きょうは昨日きのうより一度どくらい気き温おんが低ひくいね、いや私わたしは一度どくらい高たか
「今こん晩ばんがんばってな」とサヤちん。「後あとで見みにいってやるでな」とテッシー。
「来こなくていいよ！　ていうかゼッタイ来くんna！」と釘くぎを刺さしつつ、私わたしは内ない心しんで

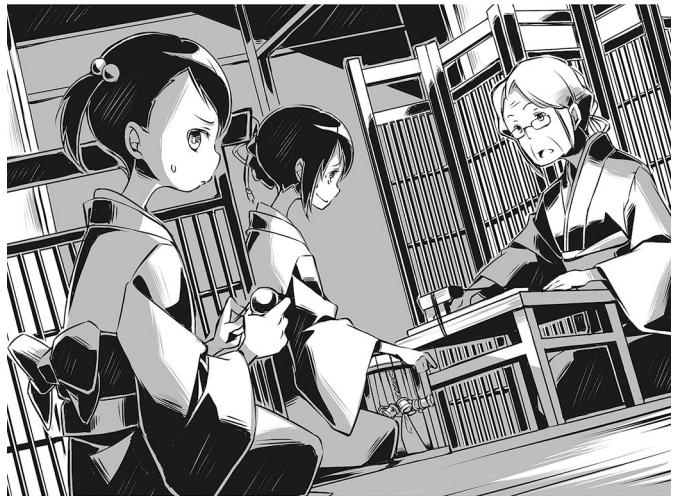
「あーん、私わたしもそっちがいいわあ」

四よつ葉はが不ふ満まんげな声こえを漏もらす。

「四よつ葉はにはまだ早はやいわ」とお祖母ばあちゃん。

八畳じょうほどの作さ業ぎょう部べ屋やには、かちんかちんと、重おもり玉だまがぶつかる音おとが聞か
「そうやってずっと糸いとを巻まいとるとな、じきに人ひとと糸いととの間あいだに感かん情じょうが流
「へ？　糸いとはしゃべらんもん」

「ワシたちの組くみ紐ひもにはな——」と、四よつ葉はの抗こう議ぎを無む視してお祖母ばあちゃんは続



「ワシたちの組くみ紐ひものにはな、糸いと守もり千年ねんの歴れき史しが刻きざまれとる。まったくあんた
また始はじまつた、と私わたしは小ちいさく苦く笑しようする。小ちいさな頃ころからこの作さ業ぎょう
『ぞうり屋やの山やま崎ざき繭まゆ五ご郎ろうの風ふ呂ろ場ばから火ひが出てて、このへんは一いっ帶たい
お祖母ばあちゃんがちらりと私わたしを見みて、
『『繭まゆ五ご郎ろうの大たい火か』』
すらりと私わたしは答こたえる。うむ、と満まん足ぞくそうなお祖母ばあちゃん。「え、火か事じに名な
『おかげで、ワシたちの組くみ紐ひもの文もん様ようが意い味みするところも、舞まいの意い味みも解わか
お祖母ばあちゃんの話はなしには小こ唄うたのような独どく特とくの拍ひょう子しがついていて、私わた
『それがワシら宮みや水みず神じん社じやの、大たい切せつなお役やく目め。せやのに……』

それから、お祖母ばあちゃんの柔にゅう和わな目めが悲かなしげに伏ふせられる。

「せやのに、あのバカ息子むすこは……。神しん職しょくを捨てて家いえを出でていくだけじゃ飽あき足た
お祖母ばあちゃんの溜ため息いきに忍しのばせて、私わたしも小ちいさく息いきを吐はく。この町まちが

夜よるの神じん社じやから流ながれてくる大和やまと笛ぶえの音おとは、例たとえば都と会かいのヒトな
毎まい年としこの時じ期きに行おこなわれる宮みや水みず神じん社じやの豊ほう穣じょう祭さいの主しゅ
あーもー、

やーだーよー！

とか思おもいつつ体からだを動うごかしていたら、すとんと舞まいは終おわってしまった。ああ。ついに

もぐもぐもぐ。

もぐ。

もぐもぐもぐもぐ。

私わたしはひたすら米こめを噛かむ。なるべくなにも考かんがえないように、味あじも音おとも色いろも
もぐもぐもぐ。

もぐもぐ。

ああ、もう。

もぐもぐもぐ。

そろそろ出ださなくちゃ。

もぐもぐ。

ああ。

もぐ。

私わたしはあきらめて、目めの前まえの升ますを取とる。口くち元もとまで持もってきて、せめてもと千
そして。ああ。

私わたしは口くちをすぼめて、今まで噛かんでいた米こめを升ますの中なかに吐はき出だす。それは
口くち噛かみ酒ざけだ。

米こめを噛かんで、唾だ液えきと混まざった状じょう態たいで放ほう置ちしておくだけで、発はっ酵こう
ふと、知しった声こえが耳みみをかすめる。さざ波なみのような嫌いやな予よ感かんを感じつつ、私

——ああ。

思おもわず神じん社じやごと爆ばく破はしたくなる。やはりそこには、イケてる派は手で系けいクラスメ

卒そつ業ぎょうしたら町まちを出でて、遠とおくに行いこう。

私わたしは強つよくつよく決けっ心しんをする。

「お姉ねえちゃん元げん気きだしないよー。いいにん、学がっ校こうのヒトに見みられたくらい。だいたい
「思し春しゅん期き前まえのお子こサマは気き楽らくでええよな！」

私わたしは四よつ葉はを睨にらみつける。私わたしたちはTシャツに着き替がえ、社しゃ務む所しょの玄
豊ほう穣じょう祭さいの後あと、私わたしたち姉妹しまいは今こん夜やの締しめくくりとして、お祭まつ
「三みつ葉はちゃんいくつになったの？　え、十七！　そうかあ、こんな若わかくて可愛かわいい子こにお
「もうガンガン若わか返がえっちゃってください！　ほらもっと飲のんで飲のんで！」

ほとんどヤケクソ気ぎ味みに接せつ待たいして、ぐったりと疲れかれ切きり、子こどもはそろそろ帰かえ
「四よつ葉は、あんたさっきの社しゃ務む所しょでの平へい均きん年ねん齢れい、知しっとる？」

境けい内だいの参さん道どうはすっかり明あかりが消きえていて、涼すずしげな虫むしの音ねがあたりい
「知しらん。六十歳さいくらい？」

「私わたし、台だい所どころで計けい算さんしてみたの。七十八歳さいやよ、七十八歳さい！」

「ふうん」

「そしてうちらがいなくなった今いま、あの空くう間かんは九十一歳さいやよ！　なんかもう大おお台だい
「んんー……」

したがって早さっ急きゅうにこの町まちから脱だっ出しゅつすべきだと私わたしは言いいたいのだけれど
「……そうや！」

神じん社じやの長ながい石いし段だんを並ならんで降おりている時ときには、突とつ然ぜんに四よつ葉はが
「お姉ねえちゃん、いっそ口くち噛かみ酒ざけをいっぱい作つくってさ、東とう京きょう行いきの資し金き
一いっ瞬しゅん、私わたしは言こと葉ばに詰つまる。

「……あんたって、すっごい発はっ想そうするな」

「生なま写じゃ真しんとメイキング動どう画がとかつてさ、『巫女みこの口くち噛かみ酒ざけ』って名な
九歳さいでこの世せ界かい観かん、大だい丈じょう夫ぶかしらと心しん配ぱいになりつつ、四よつ葉はな
「ねえ、どうお姉ねえちゃんこのアイデア？」

「うーん……」

うーん。やはり。

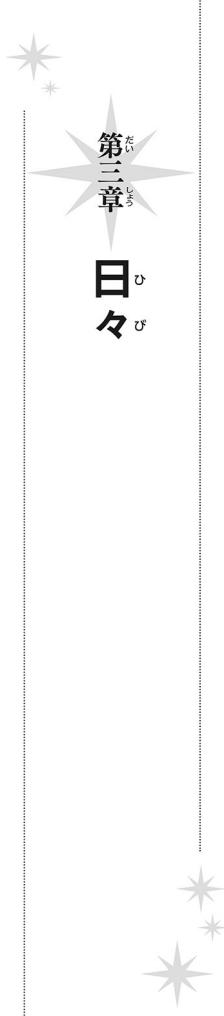
「やっぱダメ！ 酒しゅ税ぜい法ほう違ひ反はん！」

あれ、そういう問もん題だいやっけど自じ分ぶんで思おもいつつ、気きづけば私わたしは駆かけ出だして
「もうこんな町まちいややー！ こんな人じん生せいいややー！ 来らい世せは東とう京きょうのイケメン
さーい。さーい。さーい。さーい.....

夜よるの山やまにこだました私わたしの願ねがいは、眼がん下かの糸いと守もり湖こに吸すい込こまれる
ああ、それでも。

神かみさま、本ほん当とうにいるならば。
どうか——。

神かみさまが本ほん当とうにいるならば、それでもなにを願ねがえば良よいのか、私わたしは自じ分ぶん



知しらないベルの音おとだ。

まどろみの中なかでそう思おもった。目め覚ざまし？ でも、私わたしはまだ眠ねむいのだ。ていうかまあれ？

私わたしはさらに手てを伸のばす。もうウルサいなーこのアラーム。どこに置おいたっけ……。

「——痛いたっ！」

どしん、と背せ中なかが思おもいきり床ゆかにぶつかる。どうやらベッドから落おちてしまつたらしい。

ようやく目めを開あけて、私わたしは上じょう半はん身しんを起おこした。

あれ？

ぜんぜん知しらない部へ屋や。

に、私わたしはいる。

私わたし、昨日きのうどこかに泊とまつたっけ?

「.....どこ?」

と呴つぶやいたとたん、喉のどの妙みょうな重おもさに気きづく。反はん射しゃ的てきに手てをやる。硬.....ない。

見み覚おぼえのないTシャツはお腹なかまですとんとまつすぐに落おちていて、ない。

おっぱいが、ない。

そして、やけに見み通とおしの良よい下か半はん身しんのその真まん中なかに、なにかがある。おっぱい.....これ、なに.....?

そろりそろりと、私わたしはその部ぶ分ぶんに手てを伸のばしてみる。

.....これって。.....これって、もしかして部ぶ位い的てきに。

.....。

.....。

.....。

手てが触ふれる。

あやうく気きを失うしないそうに、私わたしはなる。

誰だれ、この男おとこ?

知しらない洗せん面めん所じょの鏡かがみに映うつった知しらない顔かおを、私わたしはじっと見みつめ



眉まゆにかかるくらいの、無む造ぞう作さと造ぞう作さの6：4くらいを狙ねらったようなちょっとチャ——でも。痛いたいのに、目めが覚さめない。喉のどがからからに渴かわいている。私わたしは蛇じゃ口
「タキ、起おきたかー？」

突とつ然ぜん遠とおくから男だん性せいの声こえがして、きゃっ、と私わたしは小ちいさく悲ひ鳴めいを

「.....お前まえ、今日きょうメシ当とう番ばんだっただろ？ 寝ね坊ぼうしやがって」
リビングらしき部へ屋やをこわごわ覗のぞくと、スーツ姿すがたのおじさんがちらりと私わたしを見みて。
「す、すみません！」

反はん射しや的てきに謝あやまってしまう。

「俺おれ、先さきに出でるからな。味噌みそ汁しるあるから、飲のんじゃってくれ」

「あ、ハイ」

「遅ち刻こくでも、学がっ校こうはちゃんと行いけよ」

おじさんはそう言いいながら手て早ばやく食しょっ器きを重かさねて小ちいさな台だい所どころに下さげ

「……へんな夢ゆめ」

と私わたしは声こえに出だしてみる。あらためて部へ屋やを見み回まわす。壁かべ中じゅうに、橋はしと
びろりん!

まるでツッコミみたいなタイミングで、廊ろう下かの奥おくで着ちゃく信しん音おんが響ひびいた。ひっ

もしかしてまだ家いえか? 走はしってこい! ツカサ

え、なになに? 誰だれよツカサって!?

とにかく学がっ校こうに行いかなきゃいかんのねと、私わたしは部へ屋やを見み渡わたす。窓まどの脇わ
ああ、なんてことなの.....!

.....私わたし、トイレに行いきたい.....。

どっはああああー、と、私わたしは全ぜん身しんが崩くずれ落おちるくらいのため息いきをつく。

男おとこの体からだっていいったいなんなのよ!?

なんとかトイレはクリアしたものの、怒いかりでまだ体からだが震ふるえている。

あーん、私わたし、まだ見みたこともなかったのに! はばかりながらこれでも巫女みこなのにー!

あまりの恥ち辱じょくにぎゅっとうつむいて涙なみだをこらえながら、いやこらえきれずに実じっ際さい
——すると。

目めを、奪うばわれた。

私わたしは、眼がん前ぜんの風ふう景けいに。

息いきを呑のんだ。



私わたしが立たっているのは、たぶん高たか台だいにあるマンションの廊ろう下か。
眼がん下かには大おおきな公こう園えんのような縁みどりが、たっぷりと広ひろがっている。空そらは色
それは想そう像ぞうしていたよりも——いや、考かんがえてみれば私わたしは真しん剣けんにその姿すが
——東とう京きょうだ。
と、呟つぶやいた。
世せ界かいがあんまりに眩まぶしくて、私わたしは太たい陽ようを見みる時ときみたいに、息いきを吸す

「ねーねーこれどこで買ったの?」 「レッスン帰がえりに西にし麻あざ布ぶの」 「あいつら次つぎのライ
な、なにこの会かい話わ? このヒトたちほんとに現げん代だい日に本ほんの高こう校こう生せい? F
私わたしはドアに半はん分ぶん隠かくれるようにして、教きょう室しつを観かん察さつしながら中なかに
それにもしても、この校こう舎しゃも——壁かべ全ぜん面めんのガラス窓まどに打うち放はなしのコンクリ
「たーきっ!」

「っ!」

突とつ然ぜんに背せ中なかから誰だれかに肩かたを抱だかれて、声こえにならない悲ひ鳴めいを私わたし
「まさか昼ひるから来くるとはね。メシ行いこうぜ」

そう言いってこの眼鏡めがね男だん子しは、私わたしの肩かたを抱だいたまま廊ろう下かを歩あるき出だ
「メール無む視ししやがって」と怒おこったふうでもなく彼かれは言いい、あ、と私わたしは思おもい至い
「.....ツカサ、くん?」

「はは、くん付づけ? 反はん省せいの表ひょう明めい?」

なんと答こたえて良よいか分わからず、私わたしはとりあえずすすす、と、彼かれの腕うでから体からだ

「.....迷まよったあ?」

高たか木ぎ、と呼よばれている大おお柄がらで人ひとの良よさそうな男だん子しが、呆あきれ顔がおを隠
「お前まえさあ、どうやったら通つう学がくで道みちに迷まよえんだよ?」

「えーと.....」と私わたしは口くちごもる。私わたしたちは広ひろい屋おく上じょうのすみっこに三人にん
「えーと、あの、私わたし.....」

「ワタシ?」

高たか木ぎくんと司つかさくんが、怪け訝げんそうに顔かおを見み合あわせる。しまった、今いま、私わ
「あ、その、ええと.....あ、わたくし!」

「んん?」

「僕ぼく!」

「はあ?」

「.....俺おれ?」

うむ、

と、怪け訝げんそうな表ひょう情じょうながらも二人ふたりはうなずく。なるほど、「俺おれ」ね。心こ
「.....俺おれ、楽たのしかったんやよ。なんかお祭まつりみたいににぎやかやね、東とう京きょうって」

「……なんか、お前まえなまってない？」と高たか木ぎくん。
「ええ！」なまってるの？ 私わたしはボッと赤あかくなる。
「瀧たき、弁べん当どうは？」と司つかさくん。
「えええ！」持もってきてないよ！
汗あせをだらだら流ながしながら学がく生せい鞆かばんを確かく認にんする私わたしを見みて、「熱ねつ司つかさ、お前まえなんかある？」 「卵たまごサンド。お前まえのそのコロッケ挟はさもうぜ」
ほらよ、と即そく席せきに出で来き上あがった卵たまごコロッケサンドを、そして二人ふたりは私わたし「ありがとう……」
無む言ごんでにっこり笑わらう二人ふたり。男だん子しがこんなにスマートで優やさしいなんて……！ あ
「でさ。今日きょうの放ほう課か後ご、もういっかいカフェ行いかねえ？」
そう言いった高たか木ぎくんの口くちにご飯はんが運はこばれていくのを、思おもわず私わたしは凝ぎよ
「ああ、いいね」と言ひってペットボトルの水みずを飲のむ司つかさくんの喉のどが、滑なめらかに動うご
「カフェ、瀧たきは？ 行いくだろ？」
「え！」
「だからカフェ」
「か、か、カフェえええー!?」
二人ふたりの眉み間けんのしわが深ふかくなるのも構かまわず、私わたしはテンションの上じょう昇しょ

アイドル風ふうの服ふくを着きせられた小こ型がた犬けんが二匹ひき、ちょこんと籐とう椅い子すに座す
なにこの場ば所しょ？ いい大人おとなが平へい日じつの陽ひも高たかいうちから犬いぬ連つれてカフェ
「天てん井じょうの木き組ぐみがいいね」「ああ。やっぱ手てがかかってんなあ」
そんな超ちょう絶ぜつお洒しゃ落れ空くう間かんで司つかさくんと高たか木ぎくんはまったく臆おくする
「瀧たき、決きまった？」
司つかさくんにうながされ、私わたしは店てん内ない観かん察さつを中ちゅう断だんしどっしりと重おも
「……！ こ、このパンケーキ代だいで、俺おれ一ヶ月げつは暮くらせるんですけど！」
「いつの時じ代だいのヒトだよ、お前まえは」と高たか木ぎくんが笑わらう。
「うーん……」
私わたしはしばし悩なやみ、あ、そうだ、夢ゆめだったと気きづく。じゃ、ま、いいか。お金かねも立た

はあー、いい夢ゆめー……。

マンゴーとかブルーベリーとかにどっかりと囲かこまれた要よう塞さい、といった風ふ情ぜいの重じゅうびりん。

ポケットのスマフォが鳴なる。……なんか、怒いかりマークが多た用ようされたメッセージが。

「……わ！ ねえ、どうしよう、俺おれバイト遅ち刻こくだって！ なんか上じょう司しみたいなヒトが怒「あれ、お前まえのシフト、今日きょうだっけか」と高たか木ぎくん。「じゃ、早はやく行いったら」と司「うん！」私わたしは慌あわてて立たち上あがる。あ、でも……。

「……どうした？」

「あのぉ、私わたしのバイト先さきて、どこだっけ？」

「……はああ？」

呆あきれるを通とおり越こして、なんだかキレ気ぎ味みの二人ふたり。だって私わたしこの男おとこのこ

「ねえちょっと注ちゅう文もんまだですか？」

「瀧たき！ 十二番ばんテーブルオーダー取とってこい！」

「これ、頼たのんでませんけど」

「瀧たき！ トリュフは品しな切ぎれだって言いったろ!?」

「お会かい計けいまだですかー？」

「瀧たき、そこ邪じや魔まだぞけ！」

「瀧たき、てめえ真面目まじめにやれ！」

「瀧たき！」

そこは、これまた大たい変へんに格かく式しきの高たかそうなイタリアンレストランだった。

吹ふき抜ぬけの二階かい建だてで、ピカピカのシャンデリアが吊つり下さがっていて、映えい画がで見み私わたしは注ちゅう文もんを間ま違ちがえ、配はい膳ぜんを間ま違ちがえ、お客様きやくに舌した打うちさ

「——ちょっと。ちょっとそこのお兄にいさん」

「え、あ、はい！」

私わたしはその声こえの主ぬしをちょっと通とおり過すぎてしまってから、慌あわて振ふり向むく（「うわ。開かい襟きんシャツに金きん色いろのネックレスをして何なん本ほんもごつい指ゆび輪わをはめ「ピザにさ、楊よう枝じが入はいってたんだけど」

「え？」

チンピラさんがつまみ上あげたバジルピザの最さい後ごの一ひと切きれには、断だん面めんに「刺さした

「これ、喰くっちゃったら危あぶないよね？　俺おれが気きづいたから良よかったです。……どうすん
「え……」

ご自じ分ぶんで刺さしたんですね？　とは、さすがに言いつちゃいけない気きがする。私わたしは暖あ
「どうすんのって訊きいてるんだけど!?」

ガシャン！　膝ひざでテーブルを蹴けり上あげて突とつ然ぜんに怒ど鳴なる。店みせのざわめきが瞬しゅ
「——お客様やくさま！　どうかなさいましたか？」

現あらわれた女じょ性せいに、私わたしの体からだは押おしやられた。彼女かのじょはちらりとこちらを

芝しば刈かり機きみたいにでっかい業ぎょう務む用よう掃そう除じ機きを、私わたしは床ゆかにかけてい
そして私わたしを助たすけてくれたあの女じょ性せいはテーブルを一つひとつ拭ふいて、私わたしは
「——奥おく寺でらさん」

と思おもい切きって声こえに出だしたところで、後うしろからコツンと頭あたまを小こ突づかれた。
「先せん輩ぱいだろうが！」冗じょう談だんめかした声こわ色いろで、私わたしを小こ突づいた男おとこの
「あの、奥おく寺でら先せん輩ぱい！　さっきは……」
「瀧たきくん。今日きょうは災さい難なんだったね」



先せん輩ぱいが振ふり向むいて、まっすぐに私わたしの目めを見みて言いう。ぱっちーんと天てん井じょ
「あ、いえ、災さい難なんっていうか……」
「あいつ、絶ぜつ対たい言いいがかりだよ。マニュアル通どおりタダにしてやったけどさ」
さして怒おこっているふうでもなく、先せん輩ぱいは雑ぞう巾きんをくるりと裏うら返がえしにし、別べ
「きゃっ、奥おく寺でらさん！」
と、別べつのウェイトレスさんが声こえを上あげた。
「そのスカート！」
「え？」
上じょう半はん身しんをひねって自じ分ぶんのお尻しりを見みおろした奥おく寺でら先せん輩ぱいの顔か

「怪け我がしていないか?」 「ひでえな、あの客きゃくか?」 「なんか前まえもあったよね、こういうこと」
何なん人にんかの従じゅう業ぎょう員いんが先せん輩ぱいの周しゅう囲いに集あつまってきて、心しん配
今こん度どは私わたしが助たすけなきゃ。
弾はじかれるように私わたしは思おもい、気きづいたら、先せん輩ぱいの手てを掴つかんで歩あるき出だ

緑みどりは原はらっぱ。オレンジは花はなと蝶ちょう々ちょ。もう一つくらいモチーフが欲ほしい。茶ち
スカートの裂さけ目めをつまんで、私わたしはすいすいとかがり縫ぬいをしていく。更こう衣い室し
「できました!」

ささっと五分ふんほどで仕し上あがったスカートを、私わたしは奥おく寺でら先せん輩ぱいに渡わたした
「……え、これって……」

私わたしに更こう衣い室しつに連つれてこられて、なんだか不ふ審しんげで不ふ安あんそうだった先せん
「すごい! ねえ瀧たきくんすごい! これ、前まえよりも可愛かわいい!」

スカートの裂さけ目めは十センチくらいの横よこ一いっ直ちよく線せんだったから、私わたしはその部ぶ
「今日きょうは助たすけていただいて、ありがとうございました」

やっと言いえた。

「ふふ」

先せん輩ぱいは、大おおきな瞳ひとみを柔やわらかく細ほそめる。

「——ホントはね、私わたしあの時とき、ちょっと心しん配ぱいだったのよ。瀧たきくん、弱よわいクセに
自じ分ぶんの左ひだり頬ほほを細ほそい指ゆびでトントンとたたきながら先せん輩ぱいは言いう。あ。と
「今日きょうの君きみのほうがいいよ」と、ちょっといたずらっぽく先せん輩ぱいは言いう。
「意い外がいに女じょ子し力りょく高たかいんだね、瀧たきくんって」
ずっときゅーんと、私わたしの心しん臓ぞうが跳はね上あがる。それは手て持もちのなにもかもを無む償し

帰かえりの黄き色いろい電でん車しゃは、すいていた。

今いまになって、東とう京きょうは様さま々ざまな匂においに満みちていることに私わたしは気きづく。

——そして立たち花ばな瀧たきもまた、この街まちに住すむ一人ひとりなんだ。私わたしは電でん車しゃ
「それにしても、我われながらホントに良よく出で來きた夢ゆめやなー……」

帰き宅たくした私わたしは、今朝けさ目め覚ざめたベッドにふたたび身みを投なげ出だした。

ねえねえこんな夢ゆめを見みたんやよ、ちょっとすごくない? そんなふうに、明日あしたテッシーとサ

そんなことをにやにやと想そう像ぞうしながら、私わたしは仰あお向むけになって、なんとなく立たち花

「9／7 司つかさたちとKFC喰くう」「9／6 日ひ比び谷やにて映えい画が」「8／31 建けん築ち

見み出だしをスクロールさせてさかのぼりながら、「マメな子こやねえ」と思おもわず私わたしは感かん
「いいなあ、東とう京きょう生せい活かつ」

そう呟つぶやくと、あくびがひとつ出でた。そろそろ眠ねむいかもと思おもいつつ、次つぎの写しゃ真し
「あ、奥おく寺でら先せん輩ぱい」

先せん輩ぱいがレストランの窓まどを拭ふいているその写しゃ真しんは後うしろ姿すがたで、こっそり隠
……もしかしてこの子こ、奥おく寺でら先せん輩ぱいが好すきなのかも。ふと、私わたしはそう思おもう。
私わたしはベッドから体からだを起おこし、日につ記きアブリで今日きょうのエントリーを作さく成せい

お前まえは 誰だれた?

国こく語ごのノートのあの落らく書がきを、なぜか私わたしは思おもいだした。私わたしの姿すがたにな

みつは

と書かいた。

ふわーあ.....。

三回かい目めのあくび。さすがに、今日きょうは疲つかれた。虹にじ色いろのシャワーを浴あび続つづけ

* * *

「.....なんだ、これ?」

俺おれは自じ分ぶんの手てのひらを見みながら、思おもわず声こえに出だした。



手てのひらの文も字じから視し線せんを落おとすと、しわになった制せい服ふくとネクタイ。……着き替か
「——な、な、なんだこれ!?」

今こん度どは、叫さけんでしまった。朝ちょう食しょくの席せきで、親父おやじはそんな俺おれにちらり

……そしてバイト帰がえり、駅えきまでの道みちを奥おく寺でら先せん輩ぱいと二人ふたりきりで歩あるき

「瀧たき、今日きょうもカフェ行いかね？」
「あー悪わるい、俺おれ、このあとバイト」
「ははっ、行いき先さきは分わかるのか？」
「はあ？ ……あっ、司つかさてめえ、もしかしてお前まえか？」
俺おれは反はん射しゃ的てきに声こえを荒あららげる。ていうかむしろコイツの仕し業わざであってほし
俺おれは椅い子すから立たち上あがりながら、渋しぶ々しぶと言いう。
「……いや、やっぱいいや。じゃあな」
教きょう室しつを出でていく俺おれの背せ中なかに、あいつ今日きょうはフツウじゃん？ という高たか

「……な、なんすか？」
バイトの制せい服ふくに着き替がえ更こう衣い室しつのドアを開あけると、行いく先さきを塞ふさぐよう
「……てめえ瀧たき、抜ぬけ駆がけしやがって」「説せつ明めいしろコラ」「昨日きのうお前まえら一いっ
「え……、え、まさかマジで!? 俺おれが? 奥おく寺でら先せん輩ぱいと!?’
てことは、あの日にっ記きは現げん実じつ?
「お前まえら、あれからどうなった!?’
「いや、あの……俺おれ、ほんとによく覚おぼえてないんすよ……」
「ふざけんなよコラ」
胸むなぐらを掴つかまれそうになったところで、涼すずしげな声こえがホールに響ひびいた。
「奥おく寺でら、入はいりまーす」
長ながい素す足あしとトップスから露ろ出しゅつした肩かたをぴかぴかと振ふりまきながら、奥おく寺で
「おつかれ～」
「ちわっす！」
この店みせのアイドル的てき存そん在ざいである先せん輩ぱいの眩まぶしさの前まえに、俺おれたち男お
「今日きょうもよろしくね。ね、瀧たきくん」
語ご尾びにハートマークがついていそうな甘あまさで先せん輩ぱいは言いい、ぱっちーんと音おとがしそ
「……おい、瀧たき」
地ちの底そこから響ひびくような男おとこたちの暗くらい声こえに、俺おれはハッと我われに返かえる。
——やべえ。先せん輩ぱいたちからの慟どう哭こくめいた追つい及きゅうを受うけながら、俺おれは考か
これはいったい、どういうことなんだ？ 皆みなで示しめし合あわせて俺おれをからかっている？ まさ
「みつは」って、いったいなんなんだ？

ちゅんちゅんと、鳥とりさんたちが今朝けさも元げん気きに鳴ないでいる。障しょう子じ越ごしに差さし

みつは？？？　お前まえはなんだ？　お前まえは誰だれだ？？？

極ごく太ぶとのマジックで乱らん暴ぼうに、手てのひらから肘ひじまでにでかでかと書かきつけてある雑
「お姉ねえちゃん、なにそれ？」

見みると、四よつ葉はが襖ふすまを開あけて立たっている。こっちが訊ききたいわよ、という表ひょう情
「今日きょうは自じ分ぶんのおっぱい触さわっとらんのやな。ご・は・ん！　早はよ来きない！」

ぴしゃり、と襖ふすまを閉しめるいつも通どおりの姿すがたを、私わたしは布ふ団とんに座すわったまま
「おはよー」

そう言いいながら教きょう室しつに入はいったとたん、クラスメイトたちの視し線せんが一いっ斉せいに
「な、なんか視し線せんを感かんじるんやけど……」

「まあ、しょうがないやろ。昨日きのうのアレは目め立だつもんなあ」とサヤちん。

「昨日きのうのアレ？」

席せきに座すわりながら間どう私わたしの顔かおを、サヤちんが不ふ思し議ぎそうに心しん配ぱいそうに

——ほら、昨日きのうの美び術じゅつの時じ間かん、静せい物ぶつスケッチで。え、やっぱりまた覚おぼ

「な……な……。なんよそれ？」

私わたしは青あおざめる。授じゅ業ぎょうが終おわり、ダッシュで家いえに帰かえる。居い間まで呑のん
ぞわ、と全ぜん身しんが粟あわ立だつ。同おなじ筆ひつ跡せきで、見み開ひらきページいっぱいに細こま

2年ねん3組くみ／テシガワラ♂・友ゆう人じん・オカルトマニア・バカだがいい奴やつ／サヤカ♀・友ゆ
祖そ母ぼと妹いもうとのヨツハと三人にん暮ぐらし／ど田舎いなか／父ちちは町ちょう長ちょう／巫女みこ

そしてひとりわ大おおきく、「この人じん生せいはなんなんだ？？」の文も字じ。

震ふるえながらノートを見みつめる私わたしの頭あたまに、うっすらともやが昇のぼるみたいに、東とう
私わたしの心こころのすみっこが、あり得えっこない結けつ論ろんの尻しっ尾ぼをつかむ。

「これって……これってもしかして」

「これって、もしかして本ほん当とうに……」

俺おれは部へ屋やに籠こもり、信しんじられない思おもいでスマフォを凝ぎょう視ししている。さっきか

初はつ♡原はら宿じゅく表おもて参さん道どうパニーニざんまい！／お台だい場ば水すい族ぞく館かんに男

俺おれの頭あたまの片かた隅すみが、あり得えないはずの結けつ論ろんの尾おをつかむ。

もしかして——。

俺おれは夢ゆめの中なかでこの女おんなと——

私わたしは夢ゆめの中なかでの男おとこの子こと——

入いれ替かわってる!?



*

*

*

山やまの端はから朝あさ日ひが昇のぼる。湖みずうみの町まちを、太たい陽ようの光ひかりが順じゅん番ビルの間あいだから朝あさ日ひが昇のぼる。無む数すうの窓まどを、太たい陽ようが順じゅん番ばんに光俺おれたちは、そのひとときひと時ときに、何なん度ども見みとれる。
そして私わたしたちは、だんだんと理り解かいする。

立たち花ばな瀧たき——瀧たきくんは、東とう京きょうに住すむ同おなじ歳としの高こう校こう生せいいで田舎いなか暮ぐらしの宮みや水みず三みつ葉はとの入いれ替かわりは不ふ定てい期きて、週しゅうに入いれ替かわっていた時ときの記き憶おくは、目め覚ざめるとすぐに不ふ鮮せん明めいになってしま。それでも、俺おれたちは確たしかに入いれ替かわっている。なによりも周しゅう囲いの反はん応のうがそそして、これは入いれ替かわりの体たい験けんなど意い識しきするようになってからは、夢ゆめの記どこかの田舎いなか町まちに三みつ葉はという女おんなが暮くらしているのだと、今いまでは俺おれは確そして私わたしたちは、お互たがいにコミュニケーションを始はじめた。入いれ替かわった日ひは、スマメールや電でん話わも試ためしてみたが、なぜかどちらも通つうじなかった。でもとにかく、コミュニケ

〈瀧たきくんへ 禁きん止し事じ項こうその1〉

お風ふ呂ろゼッタイ禁きん止し
体からだは見みない・触さわらない
座すわるとき脚あしを開ひらかないように
テッシーと必ひつ要よう以い上じょうに仲なか良よくしないで。彼かれはサヤちゃんとくっつけるべき
その他ほかの男だん子しには触さわるな
女じょ子しにも触さわるな

〈三みつ葉はへ 禁きん止し事じ項こうVeバーr. ジョン5〉

無む駄だ遣づかい禁きん止しだって前まえも言いったよ?
学がっ校こう・バイトに遅ち刻こくするな、いいかげん道みちを覚おぼえろ
訛なまるな
お前まえこっそり風ふ呂ろ入はいってない? なんかシャンプーの香かおりが.....
司つかさとベタベタするな誤ご解かいされるだろアホ
奥おく寺でら先せん輩ぱいと馴なれ馴なれしくするな頼たのむから

——それなのに、と、三みつ葉はの残のこした日にっ記きを読よみながら、俺おれは今日きょうも歯はぎ私わたしは瀧たきくんの日にっ記きを読よみながら、むかむかむかと腹はらが立たって仕し方かたがない

あの女 あの男

おんな おとこ は.....!

- バスケの授じゅ業ぎょうで大だい活かつ躍やくした!? 私わたしそういうキャラじゃないんだってば! しゃ
- ◀ 三みつ葉はてめえ、ばか高たかいケーキとかドカ喰ぐいしてんじゃねえよ! 司つかさたちが引ひいてるだ
- ◀ 食たべてるのは瀧たきくんの体からだ! それに私わたしだってあのお店みせでバイトしてるし! それよ
- ◀ お前まえの無む駄だ遣づかいのせいだろ! それから婆ばあちゃんとの組くみ紐ひも作づくり、あれ俺おれ
- ◀ 帰かえり道みち、奥おく寺でら先せん輩ぱいと二人ふたりでお茶ちゃしたよ! おごってあげようとしたら
- ◀ てめえ三みつ葉は、なにしてくれてんだ! 俺おれの人にん間げん関かん係けい勝かっ手てに変かえるなよ
- ◀ ちょっと瀧たきくん、このラブレターなに!? なんで知しらない男だん子しに告こく白はくとかされてんの!
- ◀ はは。お前まえって、自じ分ぶんのスペック全ぜん然ぜん活いかせてないよな。俺おれに人じん生せい預あ
- ◀ うぬぼれないでよね、彼女かのじょもおらんくせに!
- ◀ お前まえだっていねえじゃねえか!

俺 おれ は、 私は、 わたし

いないんじゃなくて作つくらないの！

*

*

*

三みつ葉はのベルの音おとだ。

てことは、今日きょうも田舎いなか暮らしだ——まどろみの中なかで、俺おれはそう思おもった。やつ俺おれは布ふ団とんから上じょう半はん身しんを起おこし、体からだを見みおろす。

このところ、三みつ葉はのパジャマはやけに厳げん重じゅうになった。以い前ぜんはノーブラにだぼっと俺おれは胸むねに手てを伸のばす。今日きょうはこれが俺おれの体からだで、自じ分ぶんの体からだに触俺おれは手てを止とめ、小ちいさく呟つぶやく。

「.....あいつに悪わるいか」

がらり、と襖ふすまが開あいた。

「.....お姉ねえちゃん、ほんとに自じ分ぶんのおっぱい好すきやな」

それだけ言いって、ぴしゃりと襖ふすまを閉しめる妹いもうとの姿すがたを、俺おれは胸むねに手てをあ.....いいよな、服ふくの上うえから、ちょっとくらい。

「お祖母ばあちゃあん。なんでうちのご神しん体たいはこんなに遠とおくにあるのぉ？」

四よつ葉はがうんざりしたように声こえを上あげる。俺おれたちの前まえを歩あるく婆ばあちゃんが、背「繭まゆ五ご郎ろうのせいで、ワシにも分わからん」

マユゴロー？

「.....誰だれ？」隣となりを歩あるく四よつ葉はに、俺おれは小こ声ごえで訊きく。

「え、知しらんの？ 有ゆう名めいやよ」

有ゆう名めい？ 田舎いなかの人にん間げん関かん係けいはよく分わからん。

宮みや水みず家けの女おんな三人にん、俺おれと婆ばあちゃんと四よつ葉はは、もう小こ一時じ間かんほ
太たい陽ようを透すかしたカエデの葉は群むれが、染そめたように赤あかい。空くう気きはからりと乾か
そういえばこの婆ばあちゃん、いくつなんだろうな。

俺おれは目めの前まえの小ちいさな背せ中なかを眺ながめながら考かんがえる。こんな山やま道みちでも
「ね、婆ばあちゃん！」

俺おれは駆かけ出だし、婆ばあちゃんの前まえで膝ひざをつき、背せ中なかを差さし出だした。この小こ
「おぶらせて。良よかったら」

おや、ええんかい？ そう言いいながらも嬉うれしそうに、婆ばあちゃんが俺おれの背せ中なかに体たい
「婆ばあちゃん、すげえ軽かる——うわっ」

立たち上あがった瞬しゅん間に重おもみで俺みつはの膝ひざがかくんと折おれて、ちょっとお姉ねえ
「三みつ葉は、四よつ葉は」

背せ中なかで婆ばあちゃんがゆったりとした声こえを出だす。

「ムスピって知しっとる？」

「ムスピ？」

俺おれのリュックを腹はらに抱かかえた四よつ葉はが、隣となりで訊きき返かえす。木き々ぎの隙すき間
「土と地ちの氏うじ神がみさまのことをな、古ふるい言こと葉ばで産靈むすびって呼よぶんやさ。この言こ
神かみさま？ 唐とう突とつになんの話はなしだ？ でも、まんが日にっ本ぽん昔むかし話ばなししたい
「糸いとを繋つなげることもムスピ、人ひとを繋つなげることもムスピ、時じ間かんが流ながれることもム
川かわのせせらぎが聞きこえる。どこかに沢さわがあるのかもしれない、と俺おれは思おもう。

「よりあつまって形かたちを作つくり、捻ねじれて絡からまって、時ときには戻もどって、途と切ぎれ、ま
透とう明めいな水みずの流ながれを、俺おれは考かんがえるともなく想そう像ぞうする。石いしにぶつか
「ほら、飲のみない」

木こ陰かげで小しょう休きゅう止し。婆ばあちゃんが水すい筒とうを手て渡わたしてくれる。

砂さ糖とうを溶とかしこんだだけの、甘あまい麦むぎ茶ちゃだった。それなのに驚おどろくくらい美味う
「それも、ムスピ」

「え？」

水すい筒とうを四よつ葉はに手て渡わたしながら、木きの根ね元もとに座すわり込こんでいる婆ばあちゃん
「知しっとるか。水みずでも、米こめでも、酒さけでも、なにかを体からだに入いれる行おこないもまた、

いつの間まにか樹じゅ木もくは途と切ぎれ、眼がん下かでスケッチブックくらいのサイズになった湖みず
「なあなあ、見みえたよ！」
はしゃぐ四よつ葉はに追おいついて、彼女かのじょの視し線せんを辿たどる。その先さきに、山やまの頂
想そう像ぞうもしていなかった風ふう景けいに、俺おれは目めを見み張はった。
里さとからは決けっして見みえない、これはまるで天てん然ねんの空くう中ちゅう庭てい園えんだ。田舎
「ここから先さきは、カクリヨ」
婆ばあちゃんが言いう。俺おれたちは窪くぼ地ちの底そこに降おりていて、目めの前まえには小ちいさな
「かくりよ？」俺おれと四よつ葉はが声こえを合あわせる。
「隠かくり世よ、あの世よのことやわ」
あの世よ。婆ばあちゃんのその昔むかし話ばなしボイスは、まるで冷れい風ふうのように俺おれの背せ中
……踏ふみ入いれたら帰かえれない、なんてことないだろうな。
「わーい、あの世よやあ～！」
しかし四よつ葉はは歓かん声せいを上あげながら、バシャバシャと小お川がわをまたいでいってしまう。
「此し岸がんに戻もどるには」ふいに神しん妙みょうな調ちょう子しで、婆ばあちゃんが口くちを開ひらいて
「ええっ！」俺おれは思おもわず声こえを上あげた。
「ちょ、ちょっと婆ばあちゃん、渡わたり終おえてから言いわないでよ！」
俺おれの抗こう議ぎに、婆ばあちゃんは目めを細ほそめて笑わらう。欠かけた歯はがのぞいて余よ計けい
「怖こわがらんでもええ。口くち噛かみ酒ざけのことやさ」
出だしんさい、と婆ばあちゃんにうながされ、俺おれと四よつ葉ははリュックからそれぞれ小こ瓶びんを
「あのご神しん体たいの下したに」と言いって、婆ばあちゃんが巨きょ木ぼくを見る。
「小ちいさなお社やしろがある。そこにお供そなえするんやさ。その酒ざけは、あんたたちの半はん分ぶん
——三みつ葉はの、半はん分ぶん。
俺おれは手ての中なかの瓶びんを見みる。あいつが米こめを噛かんで作つくったという口くち噛かみ酒ざけ

本ほん物もののひぐらしの鳴なき声ごえを、もしかして俺おれは初はじめて聞きいたかもしれない。
なぜこれがひぐらしだと分わかるのかと言ひえば、夕ゆう方がたの効こう果か音おんとして映えい画がや
バサバサと大おおきな音おとをたて、ふいに目めの前まえの茂しげみからスズメの群むれが飛とび立たつ
「もう、カタワレ時どきやなあ」

一日にちの行ぎょう事じを終おえ、宿しゅく題だいから解かい放ほうされたようなすっきりとした声こえ
「.....わああ！」

眼がん下かに見みえはじめた山やま里ざとの風ふう景けいに、俺おれは思おもわず声こえを漏もらした。



「そろそろ彗すい星せい、見みえるかな？」

四よつ葉はが夕ゆう陽ひを手てのひらでさえぎりながら、空そらを探さがしている。

「彗すい星せい？」

そういうえば朝ちょう食しょく時どきのテレビで、そんな話わ題だいをやっていたと俺おれは思おもい出だ
「彗すい星せい.....」

もう一いち度ど、俺おれは声こえに出だしている。なにかを忘わすれているような気きが、ふいにする。

そうだ、以い前ぜんも、俺おれは、

この彗すい星せいを

「おや、三みつ葉は」

気きづくと、婆ばあちゃんが覗のぞき込こむように俺おれを見み上あげている。黒くろく深ふかい目め玉
「——あんた今いま、夢ゆめを見みとるな？」

！
唐とう突とつに、
目めを覚さました。

跳はね上あげたシーツが、ベッドの下したに無む音おんで落おちる。心しん臓ぞうが肋ろっ骨こつを持も
「.....涙なみだ？」

頬ほおに触ふれた俺おれの指ゆび先さきに、水すい滴てきがのっている。

なぜ？ 理り由ゆうが分わからず、手てのひらで目め元もとをぬぐう。さっきまでの黄昏たそがれの景色
ぴろりん。

枕まくら元もとでスマフォが鳴なる。

もうすぐ着つくよー。今日きょうはよろしくね♡

奥おく寺でら先せん輩ぱいからのLINEラインだ。

着つく？ なんのことだ.....？ と、俺おれはハッとする。

「まさかまた三みつ葉はが！」

慌あわててスマフォを操そう作さし、三みつ葉はからのメモを見みる。

「デートオ!？」

俺おれはベッドから飛とび起おき、全ぜん速そく力りょくで身み支度じたくをした。

明日あしたは奥おく寺でら先せん輩ぱいと六ろっ本ぽん木ぎデートだよ！ 四よツつ谷や駅えき前まえ待ま

私わたしが行いきたいデートだけど、もし不ふ本ほん意いにも瀧たきくんになっちゃったとしたら、
ありがたく楽たのしんでくること。

待まち合あわせ場ば所しょは、さいわいに近きん所じょだった。全ぜん速そく力りょくで走はしってきた
俺おれは汗あせをぬぐい、ジャケットの襟えりを整ととのえ、三みつ葉はのアホ、と三回かい咳つぶやい
「たーきくん！」

「うわあっ！」

背はい後ごからの突とつ然ぜんの声こえに、俺おれは情なさけない声こえを上あげてしまう。慌あわてて
「ごめん、待まった？」

「待まってません！　あ、いや、待まちました！　あ、いえ、」

なにこの質しつ問もん!?　待まったく答こたえれば申もうし訳わけない気き持もちにさせるかもしれません、
「ええと、その……」

俺おれは焦あせりながらも顔かおを上あげる。目めの前まえに、奥おく寺でら先せん輩ぱいが微ほほ笑え
「……！」

俺おれは目めを大おおきく開ひらく。黒くろのミュール、白しろのフレアミニ、黒くろのオフショルダー。
ものすごく垢あか抜ぬけていて、ものすごく、綺き麗れいだった。



「.....今いま、來きたとこっす」

「良よかったです！」と、屈くつ託たくなく先せん輩ぱいが笑わらう。

「いこっか」

腕うでを取とられる。.....ああ、今いま一いっ瞬しゅん、一いっ瞬しゅんだけだけど、腕うでに胸むねが

「会かい話わが、ぜんっぜん続つづかねえ.....」

しかしトイレの中なか、鏡かがみに頭あたまを叩たたきつけたい気き分ぶんで、俺おれは深ふかくふかく
デート開かい始しから三時じ間かん、俺おれはすでに人じん生せいマックスに疲つかれ切きていた。ま

なんせ、すれ違ちがう人ひと全ぜん員いんが、口くちをぽかんと開あけて先せん輩ぱいを見みるのだ。そ
ちくしょお三みつ葉は、お前まえ先せん輩ぱいと普ふ段だんどんな会かい話わしてんだよ!?
救すくいを求もとめるように、俺おれはスマフォを開ひらいて三みつ葉はからのメモを見みる。

.....とはいえ、どうせ君きみはデートなんかしたことないでしょう。
だから以い下か、瀧たきくんのために厳げん選せんリンク集しゅうをそろえてあげました!

「うお、マジか！」
なんだよこいつ神かみじゃねえか！　俺おれはすぐるようにリンクを開ひらく。

Linkリンク1：コミュ障しようのワイが恋こい人びとGETゲットした件けん

Linkリンク2：人じん生せいで1ミリもモテたことがない、そんな君きみのための会かい話わ術じゅつ

Linkリンク3：もうウザイと思おもわれない！　愛あいされメール特とく集しゅう

.....なんか俺おれ、あいつにすげえ舐なめられてる気きがするんですけど.....。

美び術じゅつ館かんを、俺おれはようやくすこしホッとした気き分ぶんで歩あるいている。

「郷きょう愁しゅう」と名な付づけられた写しゃ真しん展てんにはとりたてて興きょう味みもないけれど、
富ふ良ら野の、津つ軽がる、三さん陸りく、陸りく前ぜん、会あい津づ、信しん州しゅう.....地ち域いき
飛び驛だ、と書かかれたエリアで、しかし足あしがひとりでに止とまった。

ここは、他ほかと違ちがう。

いや、やはり似にたような写しゃ真しんばかりなのだけれど、俺おれはここを知しっている。山やまの形
「瀧たきくん？」

声こえに目めを向むけると、先せん輩ぱいが俺おれの隣となりにいた。存そん在ざいを、一いっ瞬しゅん
瀧たきくんってさ、と、整ととのった微び笑しようで先せん輩ぱいが言いう。

「今日きょうは、なんだか別べつ人じんみたいね」

くるりと、まるでモデルのように美うつくしくターンして、先せん輩ぱいは俺おれを置おいて歩あるき出

失しつ敗ぱいした。

今日きょう一いち日にち、俺おれは気きの進すすまない課か題だいを嫌いや々いやこなすようにして、三歩ほ道どう橋きょうからは、さっきまでいた六ろっ本ぽん木ぎのビル群ぐんがまっすぐに見みえた。無むぴかぴかの髪かみも、おろしたてみたいに見みえる帽ぼう子しも服ふくも、すくなくとも今日きょうだけ「あの、先せん輩ぱい」

奥おく寺でら先せん輩ぱいは振ふり向むかない。

「……ええと、腹はらへりませんか？　どこかで晩ばん飯めしとか——」

「今日きょうは解かい散さんにしようか」

優やさしげな教きょう師しみたいな口く調ちょうでそう言いわれ、

「はい」

とっさに間ま抜ぬけな言こと葉ばを発はっしてしまった。やっと振ふり向むいた先せん輩ぱいの表ひょう「瀧たきくんって……違ちがってたらごめんね？」

「はい」

「君きみは昔むかし、私わたしのことがちょっと好すきだったでしょう」

「えええ！」バレてた!?　なんで!?

「そして今いまは、他ほかに好すきな子こがいるでしょう？」

「ええええ！」

熱ねつ帯たい雨う林りんにワープさせられたみたいに、どっと汗あせが噴ふき出でてくる。

「い、いませんよ！」

「ほんと？」

「い、いないっす！　ぜんぜん違ちがいますっ！」

「ほんとかなあ？」

先せん輩ぱいが疑うたがい深ぶかげに俺おれの顔かおを覗のぞき込こむ。他ほかに好すきな子こ？　そん

「ま、いいや」

さっぱりと明あかるい口く調ちょうでそう言いって、先せん輩ぱいの顔かおが遠とおざかる。

「え？」

「今日きょうはありがと。またバイトでね」

ひらりと手てを振ふって、それから先せん輩ぱいはあっさりと、俺おれを置おいて歩あるき出だす。俺お

夏なつの端はじっこに一人ひとり取とり残のこされたような気き分ぶんで、俺おれは夕ゆう陽ひを眺ながすべきことはもっと他ほかにあるような気きもするけれど、具ぐ体たい的てきにはなにも思おもいつかなスマフォのメモを開ひらく。三みつ葉はからのメモの続つづきがある。

デートが終おわるころには、ちょうど空そらには彗すい星せいが見みえるね。
きゃ～もうロマンチック、明日あしたが楽たのしみ♡
私わたしになっても瀧たきくんになっても、デートがんばろうね！

彗すい星せい？

空そらを見み上あげてみる。夕ゆう焼やけの名残なごりはすでになく、一等とう星せいがいくつかと、ジ「なに言いってんだ、こいつ？」

俺おれは小ちいさく口くちに出だした。そもそも目めで見みえるような彗すい星せいが来きているならばふと、胸むねの裏うら側がわがざわりとうずく。

なにかが、頭あたまから出でたがっている。

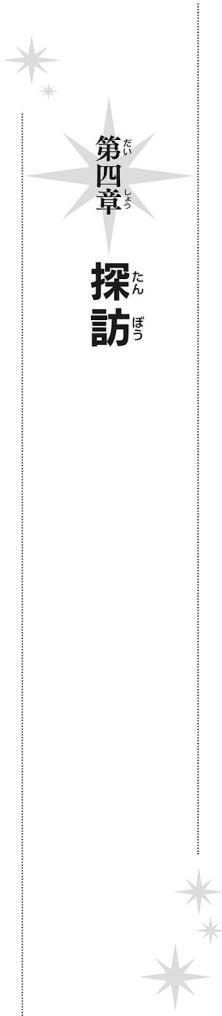
スマフォを操そう作さし、三みつ葉はの携けい帯たい番ばん号ごうを表ひょう示じする。十一桁けたのそ

お客様きゃくさまのおかけになった電でん話わ番ばん号ごうは、現げん在ざい使つかわれていないか、電でん

スマフォを耳みみから離はなし、終しゅう了りょうアイコンを俺おれは押おす。

やはり電でん話わは通つうじないのだ。まあいい。散さん々ざんだった今日きょうの結けつ果かは、次つ

でもこの日ひ以い降こうもう二に度どと、俺おれと三みつ葉はとの入いれ替かわりは起おきなかった。



鉛えん筆ぴつを、ひたすらに動うごかす。

炭たん素そ粒りゅう子しが、紙かみの纖せん維いに吸きゅう着ちゃくしていく。描びょう線せんが重かさ

通つう勤きんラッシュの中なか、毎まい朝あさ電でん車しゃに乗のって学がっ校こうに行いく。退たい屈

夜よるの部へ屋やで、俺おれは絵えを描かく。机つくえには図と書しょ館かんから借りてきた山さん岳

アスファルトの匂においの雨あめが降ふる日ひ。羊ひつじ雲ぐもが輝かがやく快かい晴せいの日ひ。黄こ

まだ真ま夏なつのように蒸むす夜よるもあれば、もう肌はだ寒ざむくてジャージを羽は織おる夜よるもあ

学がっ校こう帰がえり、バイト帰がえりに、俺おれは電でん車しゃに乗のらずに長ながい距きょ離りを歩

そしてようやく、俺おれは湖みずうみの町まちの風ふう景けい画がを何なん枚まいか仕し上あげる。
この週しゅう末まつ、出でかけよう。

そう決きめて、俺おれは久ひさしぶりにこわばっていた体からだから力ちからが抜ぬけていくのを感じ
眠ねむりに落おちる直ちょく前ぜん、今日きょうも強つよくつよく願ねがった。

それなのにまた、三みつ葉はにはなれなかった。

* * *

とりあえず三みつ日か分ぶんの下した着ぎとスケッチブックを、リュックに詰つめた。向むこうはすこし
普ふ段だんの通つう学がくよりも早はやい時じ間かんとあって、電でん車しゃは空すいていた。だが、東
と、俺おれは思おもわず自じ分ぶんの目めを疑うたがった。

「な……なんでこんなところにいるんすか!?」

目めの前まえの柱はしらに、奥おく寺でら先せん輩ぱいと司つかさが並ならんで立たっている。先せん輩
「えへへ。来きちゃった！」



.....来きちゃったってちょっと、あんた萌もえアニメのヒロインか!

俺おれは司つかさを睨にらみつける。なにか問もん題だいでも? というような涼すずしい顔かおで、奴

「司つかさてめえ、俺おれが頼たのんだのは親おやへのアリバイとバイトのシフトだろ!?

声こえをひそめて、俺おれは隣となりの座ざ席せきの司つかさに訴うたつ。新しん幹かん線せんの自
「バイトは高たか木ぎに頼たのんだ」

さらりと答こたえ、司つかさはスマフォを俺おれの前まえにかかげる。まーかせとけ! と爽さわやかに
「でも、メシおごれよ」とムービーの高たか木ぎが言いう。

「どいつもこいつも……」

俺おれは苦にが々にがしく呴つぶやく。司つかさに頼たのんだのが失しつ敗ぱいだった。俺おれは今日き「お前まえが心しん配ぱいで来きたんだよ」1ミリも悪わるびれた様よう子すもなく司つかさが言いう。

「放ほうっておけないだろ？ 美つつ人局もたせとか出でてきたらどうすんだ？」

「ツツモタセ？」

なに言ひってんだ、こいつ？ 眉まゆを寄よせた俺おれを、司つかさの奥おくに座すわっている奥おく寺「瀧たきくん、メル友ともに会あいに行いくんだって？」

「はあ？ いやメル友ともっていうか、それは方ほう便べんで……」昨さく夜や、誰だれに会あいに行いく、「ぶっちゃけ、出で会あい系けいかと」

俺おれはお茶ちゃを吹ふき出だしそうになる。

「ちげえよ！」

「お前まえ、最さい近きんやけに危あぶなっかしいからな」と、ポッキーの箱はこをこちらに差さし出だし「離はなれて見みててやるから」

「俺おれは小しょう学がく生せいか！」

くってかかる俺おれを、奥おく寺でら先せん輩ぱいが「ははーん」という表ひょう情じょうで見みている

三みつ葉はとの入いれ替かわりは、ある日ひ突とつ然ぜんに起おき、突とつ然ぜんに終おわった。理り由だが、証しよう拠こはあるのだ。スマフォに残のこされた三みつ葉はの日にっ記きは、到とう底てい俺おれだから、その体たい験けんが唐とう突とつに途と切ぎってしまったことが、俺おれは妙みょうに不ふ安あ

「はあ？ 詳くわしい場ば所しょは分わからぬ？」

特とっ急きゅう『ひだ』の四人にんがけボックス席せきで駅えき弁べんを頬ほお張ぱりながら、奥おく寺「はあ……」

「手て掛がかりは町まちの風ふう景けいだけ？ その子ことの連れん絡らくも取とれない？ なんのよソ勝かっ手についてきたくせに、なぜ俺おれが責せめられるのだ。お前まえなんとか言いえよ、という気「まったく、呆あきれた幹かん事じだな」

「幹かん事じじゃねえ！」

思おもわず怒ど鳴なってしまう。こいつら完かん璧ぺきに遠えん足そく気き分ぶんじゃねえか。そんな俺まあいいわ、と先せん輩ぱいが言いう。ふいに笑え顔がおになって、胸むねを張はる。

「安あん心しんしなさい瀧たきくん。私わたしたちが一いっ緒しょに探さがしてあげるわよ」

「きや～可愛かわいい～！　ねえ瀧たきくん、見みてみて～！」

昼ひるも過すぎてからようやく降おり立たったローカル線せんの駅えきで、地じ元もとのゆるキャラを前
「邪じや魔まだなあ……」

俺おれは駅えき舎しゃに掲けい示じされた町まちマップを睨にらみつつ、こいつらは絶ぜつ対たいに役や
プランは、こうだ。

三みつ葉はの町まちの具ぐ体たい的てきな場ば所しが分わかっているわけではないから、記き憶おくに

「……やっぱり無む理りか……」

バス停ていにぐったりと座すわり込こみ、俺おれは深ふかくうなだれている。

聞きき込こみを始はじめた時ときにはぱんぱんにみなぎっていたあの自じ信しんは、もうすっかりしほん
最さい初しょのタクシーにすげなく「うーん、知しらん」と言いわれて以い降こう、交こう番ばん、コン
俺おれの溜ため息いきを耳みみにして、バス停ていの前まえでコーラなどをごくごく飲のんでいた先せん
「ええ、もうあきらめるのかよ瀧たき!?」

「私わたしたちの努ど力りょくはどうなるのよ！」

どっはああああー、と、俺おれは肺はいごとこぼれ落おちてしまいそうな深ふかい息いきをはく。先せん
「あんたたち、1ミリも役やくに立たってないじゃん……」

アラそうかしら？　というような無む垢くな表ひょう情じょうを二人ふたりはする。

私わたし、高たか山やまラーメンひとつと、

俺おれ、高たか山やまラーメンひとつと、

あ、じゃあ、俺おれも高たか山やまラーメンひとつ。

「はいよ。ラーメン三丁ちょう！」

おばちゃんの元げん気きな声こえが店みせに響ひびく。

異い様ように遠とおい隣となり駅えきまでの不ふ毛もうな道みちのりの途と中ちゅう、奇き跡せきのよう
ラーメンも美味うまかった。名な前まえに反はんしてごく普ふ通つうのラーメンだったけれど（飛び驛だ
「今日きょう中じゅうに東とう京きょうに戻もどれるかな？」と俺おれは司つかさに訊きいてみる。

「ああ……どうかな、ぎりぎりかもな。調しらべてみるか」

意い外がいだなという顔かおを司つかさはしたが、それでもスマフォを取とり出だして帰き路ろの方ほう

「……瀧たきくん、本ほん当とうにそれでいいの？」

まだ食たべ終おえていない先せん輩ぱいが、テーブルの向むかいから俺おれに問とう。どう答こたえるべ
「……なんて言いうか、ぜんぜん見けん当とう違ちがいのことをしてるような気きがしてきて」

半なかば自じ分ぶん自じ身しんに向むけて、俺おれは呟つぶやく。東とう京きょうに戻もどって、もう一
「それ、昔むかしのイトモリやろ？」

え？ と振ふり返かえると、おばちゃんのエプロンが視し界かいに入はいった。空からになったコップに
「お兄にいちゃんが描かいたの？ な、ちょっと見みせてくれる？」

そう言ひて、おばちゃんは俺おれからスケッチブックを受うけ取とる。

「よく描かけとるわあ。なあ、ちょっと、あんた！」

厨ちゅう房ぼうに向むかい声こえを張はり上あげるおばちゃんを、俺おれたち三人にんは口くちを開あけ

「ああ、ほんとに、以い前ぜんのイトモリやな。懐なつかしいな」

「うちの人ひと、イトモリ出しゅっ身しんなんやわ」

厨ちゅう房ぼうから出でてきたラーメン屋やのオヤジが、目めを細ほそめてスケッチに見み入いっている。

——イトモリ……？

突とつ然ぜんに、俺おれは思おもい出だす。椅い子すから立たち上あがる。

「イトモリ……、糸いと守もり町まち！ そうだ、なんで思おもい出だせなかったんだろう、糸いと守もり町まち」

夫ふう婦ふが不ふ思し議ぎそうな顔かおをする。怪け訝げんそうに、顔かおを見み合あわせる。オヤジが

「あんた……知しってるやろ、糸いと守もり町まちってのは……」

司つかさがふいに声こえを上あげる。

「糸いと守もりって……瀧たき、お前まえまさか」

「え、それって、あの彗すい星せいの!?」

奥おく寺でら先せん輩ぱいまでがそう言ひて俺おれを見みる。

「え……？」

わけがわからず、俺おれは皆みなを見み回まわす。全ぜん員いんが、不ふ審しんげな色いろで俺おれを見

ぞっとするくらい寂さみしげに、トンビの鳴なき声ごえが大たい気きにたなびく。

進しん入にゅう禁きん止しのバリケードがどこまでも並ならび、割われたアスファルトに長ながい影かげ

災さい害がい対たい策さく基き本ほん法ほうによりここから立たち入りり禁きん止し。KEEPキープ

そして俺おれの眼がん下かには、巨きょ大だいな力ちからでたずたに引ひき裂さかれ、ほとんどが湖み

「……ねえ、本ほん当とうにこの場ば所しょなの？」

後うしろから歩あるいてきた先せん輩ぱいが、震ふるえるような声こえで俺おれに訊きく。俺おれの返へ
「まさか！ だからさっきから言いつてるように、瀧たきの勘かん違ちがいですよ」
「.....間ま違ちがいない」
俺おれは眼がん下かの廃はい墟きょから目めをはがし、自じ分ぶんの周しゅう囲いをぐるりと見み回まわ
「町まちだけじゃない。この校こう庭てい、周まわりの山やま、この高こう校こうだって、はっきりと覚お
自じ身しんに言いい聞きかせるために、俺おれは大おお声ごえで叫さけばなければならない。俺おれたち
「じゃあ、ここがお前まえが探さがしていた町まちだってことか？ お前まえのメル友ともが住すんでる町
乾かわいた笑わらいを声こえに貼はりつかせたまま、司つかさが大おお声ごえを出だす。
「そんなわけねえだろ！ 三年ねん前まえに何なん百びゃく人にんも死しんだあの災さい害がい、瀧たきだ
俺おれはその言こと葉ばに、ようやく司つかさの顔かおを見みる。
「.....死しんだ？」
顔かおを見みたはずが、俺おれの視し線せんは司つかさをすり抜ぬけ、その後うしろの高こう校こうをす
「.....三年ねん前まえに——死しんだ？」
ふと、俺おれは思おもい出だす。
三年ねん前まえ、東とう京きょうの空そらに見みた彗すい星せい。西にしの空そらに落おちていく無む数
あの時とき、死しんだ?
——だめだ。
認みとめてはだめだ。
俺おれは言こと葉ばを探さがす。証しょう拠こを探さがす。
「まさか.....だってほら、あいつの書かいた日につ記きだってちゃんと」
俺おれはポケットからスマフォを取とり出だす。もたもたするとバッテリーが永えい遠えんに切きれてしま
「.....！」
俺おれは目めを強つよくこする。日につ記きの文も字じがぞわりと動うごいたような気きが、一いっ瞬し
「.....なっ」
一ひと文も字じ、また一ひと文も字じ。
三みつ葉はの書かいた文ぶん章しようが、意い味みの分わからぬ文も字じに化ばけていく。やがてろう
「どうして.....」
小ちいさく口くちに出だす。トンビの一ひと鳴なきが、高たかく遠とおく、また響ひびく。



千二百年ねん周しゅう期きで太たい陽ようを公こう転てんするティアマト彗すい星せい、それが地ち球きそしてその核かくが地ち球きゅうの近きん傍ぼうで碎くだけるのを、その瞬しゅん間かんまで誰だれも予町まちは、その日ひがちょうど秋あき祭まつりだった。落らっ下か時じ刻こくは二十時じ四十二分ふん。

隕いん石せき落らっ下かにより、神じん社じやを中ちゅう心しんとした広こう範はん囲いが瞬しゅん時じクレーターはもともとあった糸いと守もり湖こに隣りん接せつして形けい成せいされたため、内ない部ぶ町まちの南みなみ側がわは比ひ較かく的てき被ひ害がいがすくなかったが、被ひ害がいを免まぬがれた千

——これはすでに教きょう科か書しょ的てき事じ実じつだから、俺おれだってだいたいのことはもちろんだが、おかしい。

つじつまが合あわない。

俺おれはつい先せん月げつまで何なん回かいも、三みつ葉はとして糸いと守もり町まちで暮らしてきたから俺おれが見みたのは、三みつ葉はの住すまいは、糸いと守もり町まちではない。

彗すい星せいと三みつ葉はとの入いれ替かわりは、無む関かん係けいだ。

そう考かんがえるのが自し然ぜんだった。そう考かんがえたかった。

だが、糸いと守もり町まち近きん隣りんにあるこの市し立りつ図と書しょ館かんで本ほんをめくりながら『消きえた糸いと守もり町まち・全ぜん記き録ろく』

『一いち夜やにして水みず沈しずんだ郷さと・糸いと守もり町まち』

『ティアマト彗すい星せいの悲ひ劇げき』

そんなタイトルのついた分ぶ厚あつい本ほんを、俺おれは片かた端はしからめくる。これらの本ほんに載息いきが苦くるしい。不ふ規き則そくに暴あばれでいる心しん臓ぞうが、いつまでも収おさまらない。

鮮あざやかな写しゃ真しんの数かず々かずに、現げん実じつ感かんと空くう気きが無む音おんのまま吸す「糸いと守もり高こう校こう・最さい後ごの体たい育いく祭さい」

そう題だいされた写しゃ真しんがある。二に人にん三さん脚きゃくをしている高こう校こう生せいたち。空くう気きがさらに薄うすくなる。

首くびの後うしろにどろりと熱あつい血ちが垂たれた氣きがして、手てでぬぐうと透とう明めいな汗あせ

「——瀧たき」

顔かおを上あげると、司つかさと奥おく寺でら先せん輩ぱいが立たっていた。二人ふたりは俺おれに一冊『糸いと守もり町まち彗すい星せい災さい害がい 犠ぎ牲せい者しゃ名めい簿ぼ目もく録ろく類るい』と書かいてある。俺おれはページをめくる。犠ぎ牲せい者しゃの名な前まえと住じゅう所しょが、地ち区

勅て使し河原がわら 克かつ彦ひこ (17)
名な取とり 早さ耶や香か (17)

「テシガワラと、サヤちん……」

俺おれの呟つぶやきに、司つかさと先せん輩ぱいの息いきを呑のむ気け配はいがする。

そして俺おれは、決けっ定てい的てきな名な前まえを見みつけてしまう。

宮みや水みず 一ひと葉は (82)

宮みや水みず 三みつ葉は (17)

宮みや水みず 四よつ葉は (9)

二人ふたりが、俺おれの後うしろから名めい簿ぼを覗のぞき込こむ。

「この子こなの……？ 絶ぜつ対たいなにかの間ま違ちがいだよ！ だってこの人ひと」

奥おく寺でら先せん輩ぱいが、なんだか泣なき出だしそうな声こえで言いう。

「三年ねん前まえに、亡なくなってるのよ」

俺おれはその言こと葉ばを押おし返かえすために、大おお声ごえで叫さけぶ。

「——つい二、三週しゅう間かんか前まえに！」

息いきが苦くるしい。必ひつ死しに吸すって、続つづける。今こん度どは囁ささやきになる。

「彗すい星せいが見みえるねって、こいつは俺おれに言いったんです……」

目めを、なんとか『三みつ葉は』の文も字じから引ひき剥はがしながら俺おれは言いう。

「だから……！」

顔かおを上あげると、目めの前まえの暗くらい窓まどに俺おれの顔かおが映うつっている。お前まえは誰

あんた今いま、夢ゆめを見みとるな？

夢ゆめ？ 俺おれは激はげしく混こん乱らんする。

俺おれは、

いったい、

なにをしている？

* * *

隣となりの部へ屋やから、宴えん会かいの音おとが聞きこえている。

誰だれかがなにかを言ひって、どっと笑わらい声ごえがあがり、どしゃ降ぶりのような拍はく手しゅが響ゴン！ と大おおきな音おとがして、気きづけば俺おれは机つくえにうつぶせていた。額ひたいを打うつ当とう時じの新しん聞ぶんの縮しゅく刷さつ版ばんや、週しゅう刊かん誌しのバックナンバー。いくら読うつぶせたままで、目めを開ひらく。数すうミリ先さきにある机つくえを睨にらみつけながら、この数す「全ぜん部ぶ、ただの夢ゆめで……」

俺おれはそれを信しんじたいのか、信しんじたくないのか。

「景色けしきに見み覚おぼえがあったのは、三年ねん前まえのニュースを無む意い識しきに覚おぼえていたあいつの存そん在ざいは、なんだ？

「……幽ゆう霊れい？ いや……全ぜん部ぶ……」

全ぜん部ぶ、俺おれの、

「……妄もう想そう？」

ハッとして、顔かおを上あげる。

なにかが、消きえている。

——あいつの、

「……あいつの名な前まえ、なんだっけ……？」

コンコン。

突とつ然ぜんノックが響ひびいて、薄うすい木きのドアが開ひらいた。

「司つかさくん、お風ふ呂ろ行いってくるって」

そう言いいながら、旅りょ館かんの浴衣ゆかたを着きた先せん輩ぱいが入はいってくる。よそよそしかつ「あの、先せん輩ぱい」

椅い子すから立たち、リュックの前まえにしゃがみ込こんでいる先せん輩ぱいに声こえをかける。

「俺おれ、なんかおかしなことばかり言ひって……。今日きょう一日にち、すみません」

なにかを丁てい寧ねいに封ふう印いんするみたいにリュックのファスナーを閉しめて、先せん輩ぱいが立

「……ううん」

そう言ひって、かすかな笑えみで先せん輩ぱいは首くびを振ふる。

「一ひと部へ屋やしか取とれなくて、すみません」

「下したで司つかさくんにも同おなじこと言いわれたわよ」

そう言ひて、先せん輩ぱいはおかしそうに笑わらった。俺おれたちは窓まど際ぎわの小ちいさなテープ
「私わたしはぜんぜん平へい気き。今こん夜やはたまたま団だん体たいさんが入はいっちゃって、部へ屋や
それから、お風ふ呂ろ上あがりに休きゅう憩けい室しつで梨なしをご馳ち走そうになってきちゃったと、
「へえ。糸いと守もり町まちって組くみ紐ひもの産さん地ちでもあったのね。きれい」

先せん輩ぱいは、糸いと守もり町まちの郷きょう土ど資し料りょう本ぼんをめくりながら呟つぶやく。俺
「私わたしのお母かあさん時とき々どき着き物ものを着きるから、うちにも何なん本ぼんかあるのよ。……」
俺おれは湯ゆ飲のみを持もった手てを止とめた。先せん輩ぱいが、俺おれの右みぎ手て首くびを見みて
「瀧たきくんのそれも、もしかして組くみ紐ひも？」

「ああ、これは……」

湯ゆ飲のみをテーブルに置おき、自じ分ぶんの手て首くびを俺おれも見みる。いつものお守まもり。糸い
……あれ?

これは、たしか――

「たしか、ずっと前まえに、人ひとからもらって……お守まもり代がわりに、時とき々どきつけてて……」
頭あたまの芯しんが、ふたたびうずく。

「誰だれに……？」

と俺おれは呟つぶやく。思おもい出だせない。

でも、この組ひもを辿たどればなにかがある、そんな気きがする。

「……ねえ、瀧たきくんも」

優やさしげな声こえに顔かおを上あげると、先せん輩ぱいの心しん配ぱいそうな顔かおがある。「お風ふ
「お風ふ呂ろ……はい……」

でも、俺おれはすぐに先せん輩ぱいから目めを離はなす。ふたたび組くみ紐ひもを見みつめる。ここで手
「……俺おれ、組くみ紐ひもを作つくる人ひとに聞きいたことがあるんです」

あれは、誰だれの声こえだ? 優やさしくてしわがれていて穏おだやかな。昔むかし話ばなししたいな。
「紐ひもは、時じ間かんの流ながれそのものだって。捻ねじれたり絡からまったり、戻もどったりつながっ
秋あきの山やま。沢さわの音おと。水みずの匂におい。甘あまい麦むぎ茶ちゃの味あじ。

「それが、ムスピ――」

弾はじかれたように、頭あたまの中なかに風ふう景けいが広ひろがった。

山やまの上うえのご神しん体たい。そこに奉ほう納のうした、あの酒さけ。

「……あの場ば所しょなら……!」

俺おれは積つまれた本ほんの下したから地ち団ずを引ひきずり出だし、広ひろげる。個こ人じん商しようあの場ば所しょまで行いければ。あの場ば所しょに、あの酒さけがあれば。
俺おれは鉛えん筆ぴつを手てにとって、それらしい地ち形けいを探さがす。あれは神じん社じやよりずっとおくで先せん輩ぱいの声こえが聞きこえたような気きがしたけれど、俺おれはもう、地ち団ずから目

.....くん。.....たきくん。

誰だれかに、名なを呼よばれている。女おんなの声こえだ。

「たきくん、瀧たきくん」

泣なき出だしそうに切せつ実じつな声こえ。遠とおい星ほしの瞬またたきのような、寂さみしげに震ふる
「覚おぼえて、ない？」

そこで、目めが覚さめた。

.....そうだ、ここは旅りょ館かんだ。俺おれは窓まど際ぎわのテーブルにうつぶせて眠ねむっていたのだ。
俺おれは体からだを起おこす。衣きぬ擦ずれの音おとが、ドキッとするほど大おおきく響ひびいた。窓ま
俺おれは手て首くびの組くみ紐ひもを見みる。さっきの少しょう女じょの声こえ、その残ざん響きょうが
——お前まえは、誰だれだ。

名なも知しらぬ少しょう女じょに問といかけてみる。当とう然ぜん、返へん事じはない。

でも、まあ、いい。

奥おく寺でら先せん輩ぱい・司つかさへ どうしても行いってみたい場ば所しょがあります。
先さきに東とう京きょうに帰かえっていてください。勝かつ手てですみません。後あとから必かならず帰か
ありがとう 瀧たき

とメモに書かいて、すこし考かんがえて財さい布ふから五千円えん札さつを出だし、メモと一いっ緒しょ
まだ会あったことのない君きみを、これから俺おれは探さがしに行いく。

* * *

無む口くちでそっけないけど、とても親しん切せつな人ひとだ。俺おれは隣となりでハンドルを握にぎる
昨日きのう、俺おれたちを糸いと守もり高こう校こうまで連つれていってくれたのも、市し立りつ図と書
助じょ手しゅ席せきの窓まどからは、新しん糸いと守もり湖この縁ふちが見み下おろせた。半はん壊かい

湖みずうみに沿そうように北ほく上じょうし、もう車くるまではこれ以い上じょう登のぼれないというと
「ひと雨あめ来くるかもしだんな」

フロントガラスを見み上あげ、ぼそりと言いう。

「ここはそう険けわしい山やまやないが、無む理りはしちゃいかん。なんかあったら必かならず電でん話わ
「はい」

「それから、これ」

そう言いって、大おおきな弁べん当とう箱ばこを突つきつけるように差さし出だしてくる。「上うえで喰
思おもわず両りょう手てで受うけ取とると、ずっしりと重おもい。

「あ、ありがとうございます……」

なにからなにまで。どうして俺おれなんかにこれほど親しん切せつに。あ、そうだラーメンすげえ美味う
「あなたの事じ情じょうは知しらんが」そう言いって煙けむりを吐はき出だす。

「あなたの描かいた糸いと守もり。あらあ良よかった」

ふいに胸むねが詰つまる。遠えん雷らいが、小ちいさく鳴なった。

獣けもの道みちのような頼たよりない参さん道どうを、俺おれは歩あるいている。

時とき折おり立たち止どまり、地ち図ずに書かき込こんだ目もく的てき地ちと、スマフォのG P Sを突つ
車くるまから降おりた後あと、オヤジが視し界かいから消きえるまで、俺おれは深ふかく頭あたまを下さ
——いつまでも、そんな顔かおをしているわけにはいかない。誰だれかの差さし出だす手てに甘あまえ続
木き々ぎの隙すき間に見みえはじめた新しん糸いと守もり湖こを眺ながめながら、俺おれは強つよくそ

どしゃ降ぶりの雨あめが、土つちを削けずり取とるような勢いきおいで降ふり続つづいている。

気き温おんが、雨あめに吸すい取とられてみるみる下さがっていくのが、肌はだで分わかる。

俺おれは小ちいさな洞どう窟くつで、弁べん当とうを食たべながら雨あめが弱よわまるのを待まっている

ムスピだ、と俺おれは思おもう。

水みずでも、米こめでも、酒さけでも、なにかを体からだに入いれる行おこないもまた、ムスピという。あの日ひ俺おれは、このことを目めが覚さめても覚おぼえていようと思おもったのだ。口くちに出だして「.....捻ねじれて絡からまって、時ときには戻もどり、またつながって。それがムスピ、それが時じ間かん」手て首くびの紐ひもを見みる。

まだ、途と切ぎれていない。まだ、つながれるはず。

いつの間まにか樹じゅ木もくの姿すがたは消きえ、周しゅう囲いは苔こけだらけの岩いわ場ばとなってい「.....あった！」

果はたしてその先さきには、カルデラ型がたの窪くぼ地ちと、ご神しん体たいの巨きょ木ぼくの姿すがた「.....本ほん当とうに、あった！夢ゆめじや、なかつた.....！」

小こ降ぶりになった雨あめが、涙なみだのように頬ほおを垂たれる。俺おれは袖そでで乱らん暴ぼうに顔記き憶おくでは小お川がわだったはずの流ながれが、ちょっとした池いけほどの大おおきさで目めの前まここから先さきは、あの世よ。

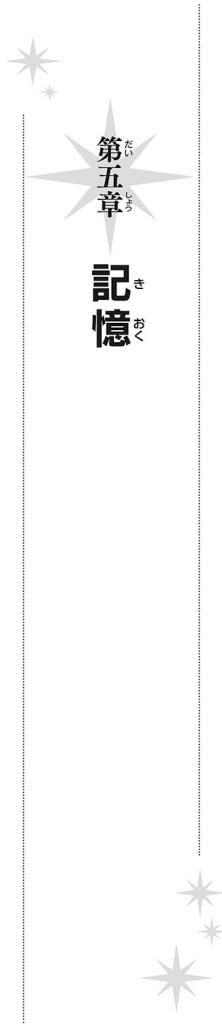


確たしか、誰だれかがそう言ひっていた。では、これは三さん途ずの川かわか。
水みずに足あしを踏ふみ込こむ。ジャバン！　とまるで湯ゆ船ぶねに足あしをつけたように水みず音おと

その巨きょ木ぼくは、大おおきな一いち枚まい岩いわに根ねを絡からませて立たっていた。
樹きがご神しん体たいなのか、岩いわがご神しん体たいなのか、それとも両りょう者しゃが絡からまつた
外そとよりも、そこは一いっ層そうに沈ちん黙もくが深ふかかった。
俺おれは凍こごえる手てで胸むねのファスナーを開あけ、スマフォを取り出だした。濡ぬれていないこ
そしてそこには、色いろと温おん度どというものがなかった。

ライトに照てらされて浮うかび上あがった小ちいさな社やしろは、完かん璧ぺきなグレイだった。石いし
「俺おれたちが、運はこんできた酒さけだ……」
俺おれはその表ひょう面めんにそっと手てを触ふれる。いつの間まにかもう、寒さむくはなかった。
「こっちが妹いもうとで」
形かたちを確たしかめ、左ひだり側がわの瓶へい子しを掴つかむ。持もち上あげる時ときには、かすかな抵
「こっちが、俺おれが持もってきたもの」
俺おれはその場ばに座すわり込こみ、目めに近ちかづけて、ライトで照てらす。ぴかぴかだったはずの陶
「……三年ねん前まえのあいつと、俺おれは入いれ替かわってたってことか？」
蓋ふたを封ふう印いんしている組くみ紐ひもをほどく。蓋ふたの下したには、さらにコルク栓せんがして
「三年ねん、時じ間かんがずれていた？ 入いれ替かわりが途と切ぎれたのは、三年ねん前まえに隕いん石
コルク栓せんを抜ぬく。かすかなアルコールの匂においが立たつ。蓋ふたに、酒さけを注ついでみる。
「あいつの、半はん分ぶん……」
ライトを近ちかづけてみる。口くち囁かみ酒さけは透すきとおっていて、ところどころに小ちいさな粒り
「ムスピ。捻ねじれて絡からまって、時ときには戻もどって、またつながって」
酒さけを注ついだ蓋ふたを、口くちに近ちかづける。
「……本ほん当とうに時じ間かんが戻もどるのなら。もう一いち度どだけ——」
あいつの体からだに！ そう願ねがいながら、一ひと口くちで飲のみ干ほした。喉のどが鳴なる音おとが
「……」
でも、なにも起おきない。
俺おれは、しばらくじっとしてみる。
慣なれない酒さけに、すこし体たい温おんが上あがったような気きがする。頭あたまにすこしだけ、ぼん
……駄だ目めなのか。
俺おれは膝ひざを立たて、立たち上あがる。と、ふいに足あしがもつれた。視し界かいが回まわる。転こ
——おかしい。
俺おれは仰あお向むけに転ころんだはずなのに、背せ中なかがいつまで経たっても地じ面めんにぶつから
「……彗すい星せい……！」
思おもわず声こえに出だした。
そこには、巨きょ大だいな彗すい星せいが描えがかれていた。
岩いわに刻きざまれた、とても古ふるい絵えだ。天てんに長ながく尾おを引ひく巨きょ大だいなほうき星
目めを見み張はった。
その絵えが、描えがかれた彗すい星せいが、俺おれに向むかって落おちてくる。

ゆっくりと、それは目もく前ぜんまで迫せまる。大たい気きとの摩ま擦さつ熱ねつで燃もえ上あがり、岩仰あお向むけに倒たおれた俺おれの頭あたまが石いしに打うちつけられるのと、彗すい星せいが俺おれの



どこまでも落おちていく。

あるいは、昇のぼっていく。

そんな判はん然ぜんとしない浮ふ遊ゆう感かんの中なか、夜よ空ぞらには彗すい星せいが輝かがやいてい
彗すい星せいはふいに割われ、片かた割われが落おちてくる。

その隕いん石せきは、山やま間あいの集しゅう落らくに落おちる。人ひとがたくさん死しぬ。湖みずうみ
時ときが経たち、湖みずうみの周しゅう囲いにはやがてまた集しゅう落らくが出で来きる。湖みずうみは
この列れっ島とうに人ひとが棲すみついでから二度ど、それは繰くり返かえされた。

人ひとはそれを記き憶おくに留とどめようとする。なんとか後のちの世よに伝つたえようとする。文も字

また、永ながい時ときが経たつ。

赤あかん坊ぼうの泣なき声ごえが聞きこえてくる。

「あなたの名な前まえは、三みつ葉は」

優やさしげな母ははの声こえ。

そして残ざん酷こくな手て応ごたえとともに、へその緒おが断たち切きられる。

最さい初しょは二人ふたりで一つだったのに、つながっていたのに、人ひとはこうやって、糸いとから切

「二人ふたりは、父とうさんの宝たから物ものだ」「あなた、お姉ねえちゃんになったんやよ」

若わかかった夫ふう婦ふの会かい話わ。やがて三みつ葉はには妹いもうとが生うまれる。しあわせと引ひ
「お母かあさん、いつ病びょう院いんから帰かえってくるん？」

妹いもうとが無む邪じや気きに問どうが、姉あねはもう、母はは戻もどらないと知しっている。人ひと
「救すくえなかつた……！」

父ちは深ふかく嘆なげく。父ちちにとて、妻つまほど愛あいした存そん在ざいはかつてなく、この先
「神じん社じやなど続づけたところで」「婿むこ養よう子しがなにを言いう！」

父ちちと祖そ母ぼのいさかいが日ひに日ひに増ます。

「僕ぼくが愛あいしたのは二ふた葉ばです。宮みや水みず神じん社じやじゃない」「出でていけ！」

父ちちも祖そ母ぼも、大たい切せつなものの順じゅん序じょを入れ替かえるにはすでに歳としを取とり
「三みつ葉は、四よつ葉は。今日きょうからずっと、祖母ばあちゃんと一いっ緒しょやでな」

重おもり玉だまの音おとが響ひびく家いえで、女おんな三人にんの生せい活かつが始はじまつた。

それなりに穏おだやかな日ひ々び。それでも、父ちちに捨てられた、という感かん情じょうは三みつ葉

——これは、

三みつ葉はの記き憶おく？

俺おれはなすすべもなく濁だく流れゆうに流ながされるように、三みつ葉はの時じ間かんにさらされてい

そして俺おれも知しっている、入れ替かわりの日ひ々び。

三みつ葉はの目めで見みる東とう京きょうは、知しらない外がい国こくのように輝かがやいている。俺おれ
「いいなあ……」

三みつ葉はの呟つぶやきが聞きこえる。

「今いま頃ごろ二人ふたりは一いっ緒しょかあ」

俺おれと奥おく寺でら先せん輩ぱいの、デートの日ひだ。

「私わたし、ちょっと東とう京きょうに行いってくるわ」と妹いもうとに言いう。

東とう京きょう？

その夜よる、三みつ葉はは祖そ母ぼの部へ屋やの襖ふすまを開あける。

「お祖母ばあちゃん、お願ねがいがあるんやけど……」

三みつ葉はの長ながい髪かみが、ぱっさりと断たち切きられる。この三みつ葉はを、俺おれは知しらない

「今日きょうが、いちばん明あかるく見みえるんやっけ」

彗すい星せいを見みにいこう、とテシガワラたちに誘さそわれている。

駄だ目めだ、三みつ葉は！

俺おれは叫さけぶ。

鏡かがみの後うしろから。風ふう鈴りんの音ね色いろとして。髪かみをそよがす風かぜとして。

三みつ葉は、そこにいちゃ駄だ目めだ！

彗すい星せいが落おちる前まえに、町まちから逃にげるんだ！



でも俺おれの声こえは、三みつ葉はには届とどかない。気きづかれない。

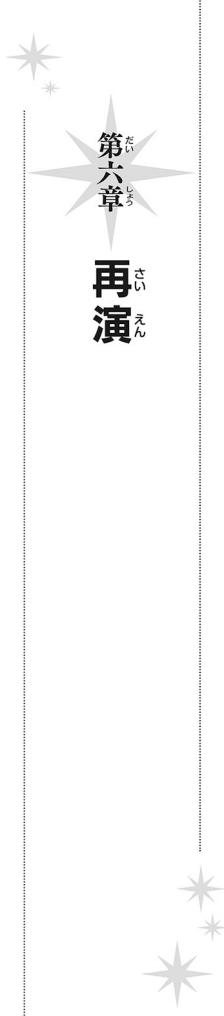
祭まつりの日ひ、三みつ葉はは友ともだちと、月つきよりも近ちかづいた彗すい星せいを見み上あげる。
彗すい星せいがふいに割われ、かけらが無む数すうの流りゅう星せいとなって輝かがやく。大おおきな岩
その眺ながめさえも、ただ美うつくしいと思おもって見みつめている。

三みつ葉は、逃にげろ！

俺おれは声こえを限かぎりに叫さけぶ。

三みつ葉は、逃にげろ、逃にげてくれ！　三みつ葉は、三みつ葉は、三みつ葉は！

そして、星ほしが落おちる。



目めを覚さました。

その瞬しゅん間にかんに、確かに信しんがあった。

俺おれは上じょう半はん身しんを跳はね上あげて、自じ分ぶんの体からだを見みる。細ほそい指ゆび。見
「三みつ葉はだ……」

声こえが漏もれる。この声こえも。細ほそい喉のども。血ちも肉にくも骨ほねも皮ひ膚ふも。三みつ葉は
「……生いきてる……！」

両りょう手てで自じ分ぶんの腕うでを抱だく。涙なみだが溢あふれてくる。蛇じゃ口ぐちが壊こわれたみ
三みつ葉は。

みつは、みつは。

それは、もしかしたら永えい遠えんに出で逢あうことのなかったかもしれない、あらゆる可か能のう性せ

「.....お姉ねえちゃん、なにしとるの？」

声こえに顔かおを上あげると、裸ふすまを開あけて四よつ葉はが立たっていた。

「あ.....妹いもうとだ.....」

俺おれは涙なみだ声ごえで咳つぶやく。四よつ葉はも、ちゃんとまだ生きている。涙なみだと鼻はな水
「四よつ葉はあああ！」

抱だきしめてやりたくて、俺おれは四よつ葉はに駆かけ寄よる。ひっ、と四よつ葉はは息いきを呑のんで
「ちょっとちょっと、お祖母ばあちゃん！」

叫さけびながら階かい段だんを駆かけ下おりる足あし音おと。

「お姉ねえちゃん、いよいよヤバイわ！　あの人ひと、完かん璧ぺき壊こわれてまったく！」

婆ばあちゃんに泣なきつく声こえが、階かい下から響ひびく。

.....失しつ礼れいな幼よう女じょだな。はるばると時じ空くうを超こえて、俺おれが町まちを救すくいに

NHKのお姉ねえさんがにこやかに喋しゃべっている。俺おれは制せい服ふくに着き替がえて、階かい下
『一週しゅう間かんほど前まえから肉にく眼がんでも見みえはじめたティアマト彗すい星せいは、今こん夜
「.....今こん夜や！　まだ間に合あう.....！」

そう咳つぶやく。武む者しゃ震ぶるいがする。

「おはよう三みつ葉は。四よつ葉は、今日きょうは先さきに出でてまったく！」

振ふり向むくと、婆ばあちゃんが立たっている。

「婆ばあちゃん！　元げん気きそう！」俺おれは思おもわず駆かけ寄よる。盆ぼんに急きゅう須すをのせて

「ああ？　.....おや、あんた」

老ろう眼がん鏡きょうを下さげて、俺おれの顔かおをじっと見みる。じわり、と目めを細ほそめる。

「.....あんた、三みつ葉はやないんか？」

「なっ.....」なんで!?　絶ぜつ対たいバレないと思おもっていた悪あく事じが露ろ呈ていしてしまったよう

「婆ばあちゃん.....知しってたの？」

婆ばあちゃんは特とくに表ひょう情じょうも変かえず、座ざ椅い子すに腰こしを下おろしながら言いう。

「いいやあ。でもこんところのお前まえを見みとったら、思おもい出だしたわ。ワシも少しょう女じょの頃

なんと！　こりや話はなしが早はやくていい。さすが日にっ本ぽん昔むかし話ばなし一いっ家か。俺おれ「あれは、たいそうおかしな夢ゆめやった。いいや、夢ゆめというよりは、あれは別べつの人じん生せいや俺おれはごくりとつばを飲み込こむ。俺おれたちと、完かん全ぜんに同おなじだ。

「でも、それはある時とき、突とつ然ぜんに終おわってまたんやさ。今いまではもう、覚おぼえどるのは消きえる……」

宿しゅく命めい的てきな病びょう名めいを告つげられたかのように、俺おれはどきりとする。そうだ。俺「だから、今いまのあんたを、見みているものを、あんたは大だい事じにしないよ。どんなに特とく別べつ「それって、もしかしたら……！」

俺おれはふと思おもう。これは、宮みや水みず家けに受うけ継つがれてきた役やく割わりなのかもしれな「もしかしたら、宮みや水みずの人ひとたちのその夢ゆめは、ぜんぶ今日きょうのためにあったのかもしれ俺おれは婆ばあちゃんの顔かおをまっすぐに見みて、強つよい口く調ちょうで、言いう。

「ねえ婆ばあちゃん、聞きいて」

婆ばあちゃんは顔かおを上あげる。俺おれの言こと葉ばをどう受うけ止とめたのか、その表ひょう情じよ「今こん夜や、糸いと守もり町まちに隕いん石せきが落おちて、みんな死しぬ」

婆ばあちゃんの顔かおが、こんどははっきりと、怪け訝げんそうに眉まゆをひそめた。

——そんなこと誰だれも信しんじないって、意い外がいに普ふ通つうのことを言いう婆ばあちゃんだな。高こう校こうまでの道みちを駆かけ下おりながら、俺おれはぶつぶつとそう思おもう。

入いれ替かわりの夢ゆめは信しんじるクセに隕いん石せき落らっ下かは疑うたがうって、どういうバラン完かん璧ぺきに遅ち刻こくの時じ間かんで、周しゅう囲いに人ひと影かげはほとんどない。ぴーちくぱー「絶ぜっ対たいに、誰だれも死しなせるもんか！」

自じ身しんに言いい聞きかせるように、俺おれは強つよく口くちに出だす。走はしる速そく度どを上あげ

「三みつ葉は、お、お前まえ、その髪かみ……！」

「あんた、その髪かみいったい……！」

テシガワラとサヤちんが、教きょう室しつに入はいってきたばかりの俺みつはの顔かおを呆ぼう然ぜんと「あ～この髪かみ？　前まえのほうが良よかったよね？」

肩かた上うえのボブカットの襟えり足あしを、俺おれは片かた手てで払はらいながら言いう。そういえば「そんなことより！」

がーん、という音おとが聞きこえそうなくらい大おおきく口くちを開あけたままのテシガワラと、探さぐ
「このままだと今こん夜や、みんな死しぬ！」

びたりと、教きょう室しつのざわめきが止やむ。クラスメイト全ぜん員いんの目めが俺おれに注そがれ
「ちょ、ちょっと三みつ葉は、なに言いっとるの!?」

サヤちんが慌あわてて立たち上あがり、テシガワラが強ごう引いんに俺おれの腕うでを引ひっぱる。二人
うーん、しかし、これは案あん外がいにやっかいか?

かと思おもったが、テシガワラに聞かんしては、それは杞き憂ゆうだった。

「.....三みつ葉は、それ、マジで言いとんのか？」

「だから、マジだってば！ 今こん夜や、ティアマト彗すい星せいが割われて隕いん石せきになる。それが
「そりゃ.....一いち大だい事じや！」

「えええ、ちょっと、テッサーなに真しん剣けんな顔かおしとんのよ、あんたそこまでアホやったの？」
当とう然ぜん、サヤちんは取とりあってくれなかった。

「だいたい情じょう報ほうソースってなんよ？ C I A？ N A S Aナサ？ 確たしかなスジ？ なにそれ
どこまでも常じょう識しき人じんのサヤちんに、俺おれはヤケクソで三みつ葉はの財さい布ふからあり
「サヤちんお願ねがい、私わたしがおごるから、これでなんでも好すきなものを買かって！ そして話はな
真しん剣けんな顔かおで言いって、頭あたまを下さげる。サヤちんは驚おどろいたように俺おれの顔かお
「お金かねにうるさいあんたがここまで言いうなんて.....」

え、そうなの？ そのくせ俺おれの金かねはばかばか無む駄だ遣づかいしてやがったのかあの女おんな！
「.....しょうがないなあ.....わけわからんけど、まあ聞きくだけやからね。テッサー、自じ転てん車しゃの鍵
こんな額がくじや駄だ菓が子しくらいしか買かえないやんとぶつぶつ言いいつつ、サヤちんは昇しよう降
「コンビニ行いってくる。テッサー、あんたはちゃんと三みつ葉はを見み張はっときないよ。その子こ、ち

そんなわけで、俺おれとテシガワラは今いまは使つかわれていない部ぶ室しつ棟とうの一いっ室しつに忍
ゴールは、被ひ害がい範はん囲い内ないの百八十八世せ帯たい約やく五百人にんを、隕いん石せき落らっ
首しゅ相しよう官かん邸てい乗のっ取とり、国こっ会かい議ぎ事じ堂どう乗のっ取とり、N H K 渋しぶ谷
「.....防ぼう災さい無む線せんや！」

テシガワラが突とつ然ぜんに大おお声ごえを出だす。
「防ぼう災さい無む線せん？」

「は？ お前まえ、知しらんとか言いうなよ。町まち中じゅうにスピーカーがあるやろ？」

「あー……、あの、朝あさ晩ばん急きゅうに喋しゃべりだすヤツ？ 誰だれが産うまれたとか誰だれの葬そ……」

「ああ。家いえの中なかでも外そとでも、あれなら町まち中じゅうで必かならず聞きこえる。あれで指示示す」

「え、でも、どうやって？ あれって町まち役やく場ばから流ながしてんだよね。お願ねがいしたら喋しゃべる」

「じゃあどうすんの？ 役やく場ば乗のっ取とり？ まあNHK乗のっ取とりよりはだいぶ現げん実じつ味ひっひひ、と不ぶ気き味みな笑えみを浮うかべて、テシガワラがスマフォになにかを入にゅう力りょくする手てがあるぜ！」

俺おれは差し出だされたスマフォを覗のぞき込む。

重ちょう疊じょう周しゅう波は数すう。その解かい説せつ。

「……え……これマジ？」

テシガワラは鼻はなの穴あなを広ひろげ、誇ほこらしげにうなづく。

「ていうかテッシー、なんでこんなこと知しってるの？」

「そりゃお前まえ、いつも寝ねる前まえに妄もう想そうしとるしな。町まちの破は壊かいとか学がっ校こう」

「え……」俺おれは若じやっ干かん引ひく。いやしかしこれは。

「いやでも、すごいじゃんテッシー！ いけるかも！」

俺おれは言ひて、思おもわずがっつりとテシガワラの肩かたに手てを回まわす。

「お、お前まえ、あんまりくっつなや！」

「え？」

「げ。こいつ耳みみまで赤あかくしてる。」

「なに～？ テッシー照てれてんの？」

俺おれは下したからテシガワラの顔かおを見み上あげ、にやにやと言ひます。三みつ葉は、お前まえもなか

「ちょ、三みつ葉は、やめろって！」

でかい体からだをくねくねとねじらせて抵てい抗こうするテシガワラ。こいつも男だん子しなあ。まあ

「やめろって言ひっとるやろ！ 嫁よめ入り前まえの娘むすめがはしたない！」

「は……」

見みると、坊ぼう主ず頭あたままで赤あかく染そめ、だらだらと汗あせを垂たらしつつ、ほとんど涙なみだ

「は、ははは！ テッシー、あんたって……！」

俺おれは思おもわず笑わらい出だしてしまう。

こいつは絶ぜつ対たいに、信しん頼らいできるいい奴やつだ。

今いままでだって、友ともだちだと思おもっていた。でもそろそろ実じっ際さいに会あって、男だん子しな

「ごめんねテッシー。信しんじてもらえたから、嬉うれしくて、つい」

俺おれは笑わらいをこらえながら、ふてくされた顔かおのテシガワラを見み上あげて言いう。

「避け難なん計けい画かくの続つづき、一いっ緒しょに考かんがえてもらえる?」

俺おれが笑え顔がおでそう言いうと、テシガワラは赤あかい顔かおのまま、それでも真しん剣けんにうな
これが終おわったら、こいつにも会あいに来こよう。なんだか眩まぶしいような心こころ持もちで、俺お

「ば、ば、ば……爆ばく弾だん!?」

透とう明めいプラケースに入はいったミニショートケーキを食たべながら、サヤちんが声こえを上あげた

「正せい確かくには、含がん水すい爆ばく薬やく。まあダイナマイトみたいなもんやな」

ポテトチップスをぱりぱりと噛かみながら、テシガワラが得とく意いげに言いう。俺おれはマーブルチョ



500mlパックのコーヒー牛ぎゅう乳にゅうをごくりと飲のんで、テシガワラが続つづける。

「爆ばく薬やくは、オヤジの会かい社しゃの保ほ管かん庫こに土ど木ぼく用ようのがたっぷりある。後あと
「それから次つぎは」俺おれはメロンパンの袋ふくろを開あけつつ言いう。なんだかやけに腹はらが減へつ
「で、で、で……電でん波ぱジャック!?」

サヤちんがまたうわづった声こえを上あげる。カレーパンをかじりながら、テシガワラが解かい説せつす
「こんな田舎いなかの防ぼう災さい無む線せんは、伝でん送そう周しゅう波は数すうと起き動どう用ようの
メロンパンを片かた手てに、俺おれは言こと葉ばを引ひき継つぐ。

「だから、学がっ校こうの放ほう送そう室しつからでも、町まち中じゅうに避ひ難なん指し示じを流ながせ

俺おれは糸いと守もり町まちの地ち図ずを指ゆびさす。宮みや水みず神じん社じゅを中ちゅう心しんに直
「これが隕いん石せきの予よ想そう被ひ害がい範はん囲い。糸いと守もり高こう校こうは、ほら、この外そ
「だから、町ちょう民みんの避ひ難なん場ば所しょもここの校こう庭ていにすればいい」
「それって……」
おそるおそる、というふうにサヤちんが口くちを開ひらく。
「か、かんべき犯はん罪ざいやに！」
そう言いいつつも最さい後ごまで残のこしていた苺いちごをぱくりと口くちに運はこぶサヤちんに、「犯
「なんか三みつ葉は、別べつ人じんみたいやな……」
俺おれはにっこり笑わらって、メロンパンを大おおきくかじる。この体からだに入はいっていると言こと葉
「で、放ほう送そうはサヤちん担たん当とうね」と、にこやかに俺おれは告つげる。
「なんですよ！」
「だって、放ほう送そう部ぶでしょ？」
「しかもお前まえの姉ねえちゃん、役やく場ばの放ほう送そう担たん当とうやし。無む線せんの周しゅう波
「えええ？ そんな勝かつ手てに……」
サヤちんの抗こう議ぎを無む視しし、テシガワラは嬉うれしそうに自じ分ぶんを指ゆびさす。
「で、俺おれが爆ばく薬やく担たん当とう！」
「そして私わたしは、町ちょう長ちょうに会あいに行く」自じ分ぶんを指ゆびさしながら俺おれも言いう
え！ と絶ぜっ句くするサヤちんに、テシガワラが説せつ明めいを続づける。
「さっき言いった手て順じゅんで、避ひ難なんのきっかけはたぶん俺おれらで作つくれる。でも、最さい後
「だから、町ちょう長ちょうの説せつ得とくが必ひつ要ようなんだよ」と俺おれは言いう。
「娘むすめの私わたしからちゃんと話はなせば、きっと分わかってもらえると思おもう」
テシガワラは腕うで組ぐみをし、「完かん璧ぺきな作さく戦せんや……！」と自じ画が自じ贊さんしつつ
「はああ一……」
感かん心しんしてくれているのか呆あきれているのか、サヤちんが口くちを開あけて俺おれたちを見みる
「まあ、良よくそこまで考かんがえどるなとは思おもうけどなあ……どうせもしもの話はなしやろ？」
「え？」
ここに至いたっての思おもいがけない問といかけに、言こと葉ばに詰つまる。
「いや……、もしもっていうか……」
サヤちんが乗のってくれないと、この計けい画かくは機き能のうしない。なんと言えばいいのか、俺お

「そうとも限かぎらんぞ！」

と、突とつ然ぜんにテシガワラが大おお声ごえで、スマフォの画が面めんを突つきだした。

「糸いと守もり湖こがどうやって出で来きたか、知しっとするか？」

俺おれとサヤちゃんは寄より目めになつて画が面めんを見みる。町まちのHホームPページらしきサイトに
「隕いん石せき湖こや！　すくなくとも一度どは、この場ば所しょには隕いん石せきが落おちたんや！」

テシガワラのどや顔がおとその言こと葉ばが、カチリ、と俺おれの頭あたまの中なかになにかをはめる。

「そうだ、そうだよ……だから！」

——だから、あの場ば所しょに彗すい星せいの絵えがあったんだ。俺おれは思おもい至いたる。千二百年
思おもいがけない味み方かたを得えたような気き持もちになる。じっとしていられなくなる。全ぜん部ぶ
「いいねテッシー！」

思おもわず拳こぶしを突つき出だすと、テシガワラも「おお！」と拳こぶしを合あわせてくれる。

いける。これはいける！

「やろうぜっ、俺おれたちでっ！」

俺おれたちはサヤちゃんに向むかって、つばを飛とばす勢いきおい声こえをそろえた。

「……なにを言ひってるんだ？　お前まえは？」

分ぶ厚あつい段だんボールにハサミを入いれるようなざらついた重おもい声こえ。

俺おれはますます焦あせる。押おし切きられないように、声こえを張はる。

「だからっ！　念ねんのために町ちょう民みんを避ひ難なんさせないと——」

「すこし黙だまれ」

それはすこしも大おお声ごえではないのに、ぴしりと俺おれの声こえをせき止とめてしまう。

三みつ葉はの父ちち親おやである宮みや水みず町ちょう長ちょうは大たい儀ぎそうに目めをつむり、町ち
「……彗すい星せいが二つに割われてこの町まちに落おちる？　五百人にん以い上じょうが死しぬかもしれ

指ゆび先さきでトントンと机つくえを叩たたきながら、たっぷりと間まをあけ、ようやく俺おれを見みる

「信しんじられない話はなしだっていうのは分わかるよ。でも、ちゃんと根こん拠きよだって……」

「よくもそんな戯ざれ言ごとを俺おれの前まえで！」

突とつ然ぜん怒ど鳴なりつけられる。町ちょう長ちょうは眉み間けんのしわを深ふかくし、「妾もう言げ

「本ほん気きで言ひっているなら、お前まえは病びょう気きだ」

「……なっ」

俺おれは言こと葉ばが継つげない。つい三十分ぶん前まえの部ぶ室しつでの自じ信しんが、もうどこにも

「車くるまを出だしてやるから」ふいに心しん配ぱいそうな口く調ちようになり、町ちょう長ちょうが受じ
「市し内ないの病びょう院いんで医い者しゃに診みてもらえ。その後あとでなら、もう一いち度ど話はなし
その言こと葉ばが、俺おれの体からだを不ふ快かいで揺ゆさぶる。こいつは、俺おれを、自じ分ぶんの娘
怒いかりだった。

「——バカにしやがって！」

そう叫さけんでいた。目めの前まえに見み開ひらいた町ちょう長ちょうの両りょう目めがあって、気きづ



「.....はっ」

手てを、ゆるめた。ゆっくりと、町ちょう長ちょうの顔かおが離はなれていく。驚おどろきか困こん惑わ
「.....三みつ葉は」

空くう気きを絞しぼり出だすように、町ちょう長ちょうが口くちを開ひらいた。

「……いや……お前まえは、誰だれだ？」

震ふるえて発はっせられたその言こと葉ばは、風かぜに乗のって入はいってしまった羽は虫むしのよう

金かな槌づちを打うつ音おとが、どこからかかすかに聞きこえる。

真ま昼ひると夕ゆう方がたのはざまの時じ間かん、この町まちは静しずかすぎて、ずっと遠とおくの音おじや、あとでなー、と子こどもの声こえが上うえから聞きこえ、俺おれは顔かおを上あげた。

坂さかの上うえで、ランドセルの子こどもたちが手てを振ふり合あっている。

「うん、じゃああとでお祭まつりでな」

「神じん社じやの下したで待まち合あわせな」

そう言いって友ともだちと別わかれ、男おとこの子こと女おんなの子こが俺おれのほうに駆かけ下おりて
——落らっ下か地ち点てんは、神じん社じや。

「行いっちゃだめだ！」

俺おれの横よこを駆かけ抜ぬけようとした男おとこの子この肩かたを、思おもわず俺おれは掴つかんでい

「町まちから逃にげて！ 友ともだちにも伝つたえて！」

俺おれの腕うでの間あいだで、知しらない子こどもの顔かおがさっと恐きょう怖ふの色いろに変かわる。

「な、なんや、あんた！」

思おもいきり手てを払はらいのけられる。俺おれは我われに返かえる。

「お姉ねえちゃんー！」

声こえの方ほう向こうを見みると、ランドセル姿すがたの四よつ葉はが心しん配ぱい顔がおで駆かけ下お

「ちょっとお姉ねえちゃん、あの子こらになにしたん!?」飛とびつくようにして俺おれの両りょう腕うでを抱
——でも、これから俺おれは、どうすればいい？

四よつ葉はの顔かおを見みる。不ふ安あんそうに俺おれの言こと葉ばを待まっている。三みつ葉はなら、

「三みつ葉はなら……説せっ得とくできたのか？ 俺おれじゃだめなのか？」

戸と惑まどう四よつ葉はに、俺おれはかまわず重かさねる。

「四よつ葉は、夕ゆう方がたまでに婆ばあちゃんを連つれて、町まちから出でて」

「え？」

「ここにいちゃ死しんじゃうんだよ！」

「えええ、ちょっとお姉ねえちゃんに言いっとるの!?」

大だい事じな話はなしなんだよ、という俺おれの言こと葉ばを押おし戻もどすように、四よつ葉はが必ひ

「お姉ねえちゃん、ちょっとしっかりしてよ！」

目めが潤うるんでいる。怖こわがっている。俺おれの目めを覗のぞき込こむように、ぐっと背せ伸のびし
「昨日きのうは急きゅうに東とう京きょうに行いってまうし、お姉ねえちゃん、このところずっと変へんや
「え……」

違い和わ感かんを、俺おれは覚おぼえる。……東とう京きょう？

「四よつ葉は、いま東とう京きょうって」

「おーい、三みつ葉はあ！」

サヤちんの声こえ。顔かおを上あげると、テシガワラの漕こぐ自じ転てん車しゃの後うしろで、サヤちん
「オヤジさんとの話はなし、どうやった!?」

前まえのめりにテシガワラが訊きく。俺おれは返へん事じが出で来きない。混こん乱らんしている。なに
おい三みつ葉は？ と訝いぶかしげなテシガワラの声こえが聞きこえる。お姉ねえちゃん、どうしたん？
三みつ葉はは、どこにいる？ 俺おれは、今いま、どこにいる？

——もしかして。

俺おれは視し線せんを上あげる。民みん家かの向むこうにこんもりとした山やまの輪りん郭かくが重かさ
「そこに……いるのか？」俺おれは呟つぶやく。

「え、なになに、あっちになんかあるん？」

四よつ葉はとサヤちんとテシガワラも、そろって俺おれの視し線せんを追おう。三みつ葉は、お前まえが
「テッシー、ちょっと自じ転てん車しゃ貸かして！」

言いいながら、俺おれは奪うばうようにハンドルを掴つかむ。サドルにまたがり、地じ面めんを蹴ける。
「え、おい、ちょっと三みつ葉は！」

サドルがやけに高たかい。俺おれは立たち漕こぎで、坂さか道みちを登のぼり出だす。

「三みつ葉は、作さく戦せんはあ!?」

遠とおざかる俺おれに、なんだか泣なきそうな声こえでテシガワラが叫さけぶ。

「計けい画かく通どおり、準じゅん備びしておいてくれ！ 頼たのむ！」

しんとした町まちに、俺おれの大おお声ごえがこだまする。体からだから切きり離はなされた三みつ葉は

* * *

頬ほおを、誰だれかが叩たたいている。

とても微び妙みょうな力ちからで、たぶん中なか指ゆびの先さきだけで、私わたしが痛いたがらないよう私わたしは目めを開ひらく。

あれ?

そこはとても暗くらい。まだ夜よるなのかな。

また頬ほおを叩たたかれる。違ちがう。これは水みずだ。水すい滴てきが、さっきから私わたしの頬ほお「.....私わたし、瀧たきくんになっとる！」と、思おもわず声こえが出でる。

狭せまい石いし段だんを登のぼると、まっすぐに夕ゆう陽ひが目めを刺さした。

ずいぶん長ながい間あいだ暗くら闇やみにいたのか、瀧たきくんの目めにはひりひりと涙なみだが滲にじどうして、瀧たきくんがこんなところに?

なんだかよく分わからないまま、私わたしは巨きょ木ぼくの下したを出でて、窪くぼ地ちを歩あるき始はそして私わたし自じ身しんの記き憶おくは、なんだかぼんやりしている。

なにも思おもい出だせないまま、私わたしはやがて窪くぼ地ちの端はし、斜しゃ面めんの下したまで辿た祭まつりばやし。浴衣ゆかた。鏡かがみに映うつった、髪かみを短みじかくした自じ分ぶんの顔かお。

——そうだ。

昨日きのうは秋あき祭まつりで、私わたしはテッシーたちに誘さそわれて浴衣ゆかたを着きて出でかけたテッシーとサヤさんは、私わたしの新あたらしい髪かみ型がたにずいぶん驚おどろいていた。テッシーな一車しゃ線せんの細ほそい道みちを登のぼりきり、カーブミラーを曲まがると、視し線せんのまっすぐ先そしていつのまにか、彗すい星せいの先せん端たんが二つに分わかかれていることに、私わたしは気きづい



私わたしは、ようやく斜しや面めんを登のぼり切きる。吹ふきつける風かぜが冷つめたい。眼がん下かにあれ? と私わたしは思おもう。

おかしい。

私わたしはさっきから、氷こおりづけにされたみたいにがちがちと震ふるえている。

いつのまにか、怖こわくてたまらない。

怖こわくて怖こわくて、不ふ安あんで悲かなしくて心こころ細ぼそくて、頭あたまがどうにかなってしまもしかしたら。

私わたしは狂くるってしまったのかもしれない。自じ分ぶんでも気きづかぬうちに、壊こわれてしまった怖こわい。怖こわい。今いますぐに叫さけび出だしたいのに、喉のどからは粘ねばついた息いきしか出で糸いと守もり町まちが、ない。

糸いと守もり湖こに覆おおい被かぶさるようにして、もっと大おおきな丸まるい湖みずうみが出で来て——そんなのあたりまえだよ、と私わたしの中なかのどこかが思おもう。

あんなものが落おちてきたんだから。

あんなに熱あつくて重おもい塊かたまりが、頭あたまの上うえに落おちてきたんだから。

そうだ。

あの時とき、私わたしは。

関かん節せつが無む音おんのまま壊こわれたみたいに、私わたしは突とつ然ぜんに、その場ばに膝ひざを私わたしは、あの時とき。

かろうじて、喉のどから漏もれた空くう気きが声こえになる。

「.....私わたし、あの時とき.....」

そして洪こう水ずいみたいに流ながれ込こんでくる、瀧たきくんの記き憶おく。一つの町まちを滅ほろぼ「死しんだの.....？」

* * *

人ひとの記き憶おくは、どこに宿やどるのだろう。

脳のうのシナプスの配はい線せんパターンそのものか。眼がん球きゅうや指ゆび先さきにも記き憶おくはすこし前まえにアスファルトは途と切ぎれ、俺おれは未み舗ほ装そうの山やま道みちをひたすらに自じ転三みつ葉はの魂たましい。それはきっと今いま、俺おれの体からだの中なかにいるはずだ。俺おれの心こ俺おれたちは今いまも、一いっ緒しょにいる。

三みつ葉はは、すくなくとも三みつ葉はの心こころのかけらは、今いまもここにある。たとえば、三みつ——たきくん。

三みつ葉はの声こえが体からだの内うち側がわから、さっきから聞きこえている。

たきくん、瀧たきくん。

泣なき出だしそうに切せつ実じつな声こえだ。遠とおい星ほしの瞬またたきのような、寂さみしげに震ふ

ぼやけていたフォーカスが、結むすばれていく。瀧たきくん、と三みつ葉はが呼よんでいる。

「覚おぼえて、ない？」

あの日ひの三みつ葉はの記き憶おくを、そして俺おれは思おもい出だす。

* * *

その日ひ、三みつ葉はは学がっ校こうには行いかずに、電でん車しゃに乗のった。

東とう京きょうへの新しん幹かん線せんが接せつ続ぞくする、大おおきなターミナル駅えき。そこに向むく「私わたしちょっと、東とう京きょうに行いってくるわ」

朝あさ家いえを出でて、学がっ校こうに向むかう途と中ちゅうで唐とう突とつに、三みつ葉はは妹いもう「ええ、今いまから？ なんで!?」四よつ葉はは驚おどろいて姉あねに訊きく。

「ええと……デート？」

「え！ お姉ねえちゃん、東とう京きょうに彼かれ氏しおったの!?」

「うーんと……私わたしのデートやなくて……」

説せつ明めいに困こまり、三みつ葉はは駆かけ出だす。走はしりながら付つけ加くわえる。

「夜よるには帰かえるで、心しん配ぱいしんといて！」

新しん幹かん線せんの窓まどをびゅんびゅんと飛とび去さる景色けしきを眺ながめながら、三みつ葉はは奥おく寺でら先せん輩ぱいと瀧たきくんのデートの場ばに行いって、私わたしはどうしたいんだろう。さ拍ひょう子し抜ぬけするくらいあっさりと簡かん単たんに、新しん幹かん線せんは東とう京きょうに着つ会あえっこない、と三みつ葉はは思おもう。

でも、駅えきの案あん内ない板ばんを試し験けん問もん題だいみたいに凝ぎょう視して、三みつ葉ははでも、もし会あえたら……。

山やま手のて線せんに乗のり、都とバスに乗のり、歩あるき、また電でん車しゃに乗のり、また歩あるくどうしよう、やっぱり迷めい惑わくな。気きまずいかな。それとも——

街がい頭とうテレビには、『ティアマト彗すい星せい・明あ日す最さい接せつ近きん』の文も字じ。

それとも、もし会あえたら、もしかしたら、すこし——

歩あるき疲つかれ、歩ほ道どう橋きょうからきらきら光ひかるビルを眺ながめながら、三みつ葉はは祈いもし会あえたら、瀧たきくんは、すこしは、喜よろこぶかな——。

ふたたび三みつ葉はは歩あるき出だす。そして考かんがえる。

こんなふうにやみくもに探さがし回まわったって、会あえっこない。会あえっこないけれど、でも、確た
100パーセント、誰だれだってぜったいに間ま違ちがえようのない足たし算ざんの問もん題だいみたい

駅えきのホームの屋や根ねの隙すき間に、懐かい中ちゅう電でん灯とうみたいな夕ゆう陽ひが沈しづん
歩あるき続づけて痛いたむ足あし先さきを投なげ出だして、三みつ葉はは駅えきのベンチに座すわり込
ふと、息いきを呑のんだ。

弾はじかれるように、立たち上あがった。

今いま、目めの前まえを通とおり過すぎた窓まどに、彼かれがいた。

三みつ葉はは走はしり出だす。電でん車しゃは停てい車しゃし、その窓まどにはすぐに追おいつく。でも、
目めの前まえには、三年ねん前まえの、まだ中ちゅう学がく生せいだった俺おれが立たっている。

* * *

自じ転てん車しゃでは、もうこれ以い上じょうは登のぼれない。

そう考かんがえたとたん、前ぜん輪りんが木きの根ねにとられてずるりと滑すべった。

俺おれは反はん射しゃ的てきに近ちかくの幹みきを掴つかむ。体からだから離はなれた自じ転てん車しゃ
どうして忘わすれていたんだろう。どうして今いままで思おもい出だせなかつたんだろう。

走はしりながら、内うち側がわから湧わき出でてくる記き憶おくに目めを凝こらす。

三みつ葉は。三年ねん前まえ、お前まえはあの日ひ、俺おれに——。

* * *

——たきくん。たきくん、瀧たきくん。

三みつ葉ははさっきから、口くちの中なかだけで俺おれの名な前まえをころがしている。目めの前まえに
「瀧たきくん」

中ちゅう学がく生せいの俺おれは、突とつ然ぜん名なを呼よばれたことに驚おどろいて顔かおを上あげる

「え」

「あの、私わたし」

必ひっ死しの笑え顔がおでそう言いって、三みつ葉はは自じ分ぶんを指ゆびさしてみせる。俺おれは戸と
「え？」

「……覚おぼえて、ない？」おずおずと、上うわ目め遣づかいになって、知しらない女おんなが俺おれにそ
「……誰だれ？　お前まえ」

三みつ葉はは小ちいさく悲ひ鳴めいのような息いきをあげる。みるみる赤あかくなっていく。目めを伏ふ
「あ……すみません……」

電でん車しゃが大おおきく揺ゆれる。乗じょう客きゃくはそれぞれにバランスをとるが、三みつ葉はだけ
次つぎは・四よツ谷や。そうアナウンスが言いい、三みつ葉ははすこしホッとして、同どう時じにたまら
「あんたの名な前まえは……」

三みつ葉はは振ふり向むく。でも、降こう車しゃの人ひと波なみに押おされて離はなれていく。三みつ葉
「みつは！」

俺おれは思おもわず手てを伸のばす。薄うす暗ぐらい電でん車しゃに細ほそく差さし込こんだ夕ゆう日ひ
「名な前まえは、三みつ葉は！」

* * *

三年ねん前まえのあの日ひ。お前まえは俺おれに、会あいに來きたんだ。

俺おれはようやくそれを知しる。

電でん車しゃで知しらない女おんなに声こえをかけられただけの、俺おれにとてはすっかり忘わすれて
胸むねが詰つまる。でももうどうしようもなくて、俺おれはただがむしゃらに走はしる。三お葉れの顔か
頂ちょう上じように、ついに來きたのだ。

冷つめたい空くう気きを、俺おれは思おもいきり吸すう。そして、ぜんぶの想おもいを吐はき出だすよう
「三みつ葉はあー！」

声こえが、聞きこえた。

私わたしは顔かおを上あげる。立たち上あがって、あたりを見み回まわす。

ご神しん体たいの盆ぼん地ちをぐるりと取とり囲かこむ岩いわ場ばに、私わたしはいる。沈しづみかけの

「……瀧たきくん？」

私わたしは呟つぶやいてみる。冷つめたい空くう気きを、大おおきく吸すい込こむ。そして瀧たきくんの
「瀧たきくーん！」

聞きこえた。

いる。三みつ葉ははここにいる。

俺おれは駆かけ出だす。斜しゃ面めんを登のぼり、盆ぼん地ちの縁ふちに駆かけ上あがる。

360度ど、ぐるりと見み渡わたすが人ひと影かげはない。でも、いるはずだ。強つよく感かんじる。俺
「三みつ葉はあ！　いるんだろ？　俺おれの体からだの中なかに！」

瀧たきくんだ！

私わたしは確かく信しんする。姿すがたの見みえない空そらに、大おお声ごえで問とう。

「瀧たきくん！　ねえ、どこ!?　声こえは聞きこえるのに！」

盆ぼん地ちの縁ふちを、私わたしは駆かけ出だす。

声こえが、声こえだけが聞きこえる。

この声こえが——俺おれの声こえが、三みつ葉はの声こえが、現げん実じつの空くう気きを震ふるわせて

「三みつ葉は、どこだ!?」

でも俺おれは叫さけぶ。叫さけばずにはいられない。盆ぼん地ちの縁ふちを全ぜん力りょくで走はしる。

そうすれば瀧たきくんに追おい続ける。そんな妄もう想そうめいた気き持もちで、私わたしは走はしる。

あ！

思おもわず声こえに出だして、私わたしは立たち止どまる。

立たち止どまり、俺おれは慌あわてて振ふり返かえる。

いま、確たしかに、すれ違ちがった。

あたたかな気け配はいが目めの前まえにある。胸むねの中なかで心しん臓ぞうが跳はねている。

姿すがたは見みえないけれど、きっと瀧たきくんが、ここに、すぐそこに、いる。
どきどきと、心しん臓ぞうが高たか鳴なっている。
ここにいる。私わたしは手てを伸のばす。

ここにいる。俺おれは手てを伸のばす。
——でも、指ゆび先さきはどこにも触ふれない。
「……三みつ葉は？」
返へん事じを待まつ。でも、誰だれも答こたえない。
やはり、だめなのか。会あえないのか。もう一いち度ど、俺おれは周しゅう囲いを見み渡わたす。山やま
俺おれは目めを伏ふせ途と方ほうに暮くれて、細ほそく長ながく、息いきを漏もらす。
そよ、と風かぜが吹ふき、髪かみがふわりと持もち上あがる。汗あせはすっかり乾かわいている。温おん
そうだ。こういう時じ間かん帯たいの、呼よび名ながった。黄昏たそがれ。誰たそ彼かれ。彼かは誰た

——カタワレ時どきだ。

声こえが、重かさなった。
まさか。
雲くもからゆっくりと目めを外はずして、俺おれは正しょう面めんを見みる。
そこには、三みつ葉はがいた。
まんまるに見み開ひらいた瞳ひとみで、ぽかんと口くちを開あけて、俺おれを見みている。
驚おどろきよりも、その間ま抜ぬけな表ひょう情じょうが愛いとおしくておかしくて、俺おれはゆっくり
「三みつ葉は」
そう呼よびかけると、三みつ葉はの両りょう目めにみるみる涙なみだが盛もり上あがる。
「……瀧たきくん？ 瀧たきくん？ 瀧たきくん？ 瀧たきくん？」
ばかみみたいに繰くり返かえしながら、三みつ葉はの両りょう手てが、俺おれの両りょう腕うでに触ふれる



「.....瀧たきくんがおる.....！」

絞しぼり出だすみたいにそう言ひって、ぽろぽろと大おお粒つぶの涙なみだをこぼす。

やっと逢あえた。本ほん当とうに逢あえた。三みつ葉はは三みつ葉はとして、俺おれは俺おれとして、自
「お前まえに、会あいに來きたんだ」

それにしても、こいつの涙なみだは小ちいさなビー玉だまみたいに透すきとおってころころしている。俺
「ホント、大たい変へんだったよ！　お前まえすげえ遠とおくにいるから」

そう、本ほん当とうに遠とおくに。場ば所しょも時じ間かんも違ちがうところに。

目めをぱちくりさせて、三みつ葉はは俺おれを見みる。

「え.....でも、どうやって？　私わたし、あの時とき.....」

「三みつ葉はの口くち噛かみ酒ざけを、飲のんだんだ」

ここまで苦く労ろうを思おもいながら俺おれがそう言いうと、三みつ葉はの涙なみだがぴたりと止とま
「え……」

絶ぜつ句くしている。まあそうだよな、それは感かん激げきしちゃうよな、うん。

「あ……あ……」

そろりそろりと、俺おれから離はなれていく三みつ葉は。ん?

「あ……、あれを飲のんだあ!?」

「え？」

「ばか！ ヘンタイ！」

「え、ええ!？」

顔かおを真まっ赤かにして、どうやら三みつ葉はは怒おこっている。いや、これって怒おこる流ながれか
「そうだ！ それにあんた、私わたしの胸むねさわったやろ!?」

「おま！」俺おれは思おもいきり動どう搖ようする。「ど、どうしてそれを……」

「四よつ葉はが見みとったんやからね！」両りょう手てを腰こしにやって、子こどもを叱しかりつけるよう
「ああ、すまん、つい……」ちっ、あの幼よう女じょよけいなことを。手てのひらに汗あせがにじんでく
「一回かい、一回かいだけだって！」

言いい訳わけになってないじゃーん！ 俺おれのばか！

「……一回かいだけえ？ うーん……」

あれ？ 三みつ葉ははなにやら考かんがえ込こんでいる。一回かいだけなら許きょ容よう範はん囲いって
「……いや、何なん回かいでも同おなじや！ あほ！」

やっぱだめか。俺おれは観かん念ねんし、ぱちんと両りょう手てを合あわせて「すまん！」と頭あたまを
「あ、それ……」

ころりと表ひょう情じょうを変かえ、三みつ葉はが驚おどろいたように俺おれの右みぎ手てを指ゆびさす
「ああ、これ」

組くみ紐ひもだ。三年ねん前まえ、三みつ葉はから受うけ取とったもの。俺おれは紐ひもを留とめていた
「お前まえさあ、知しりあう前まえに会あいに来くるなよ……分わかるわけねえだろ」

外はずした紐ひもを、ほら、と三みつ葉はに手て渡わたす。あの時ときの電でん車しゃでの三みつ葉はの
「三年ねん、俺おれが持もってた。今こん度どは、三みつ葉はが持もってて」

両りょう手てに持もった組くみ紐ひもから顔かおをあげ、

「うん！」と嬉うれしそうな笑え顔がおになって三みつ葉はが応こたえる。三みつ葉はが笑わらうと——今
三みつ葉はは自じ分ぶんの頭あたまにくるりと組くみ紐ひもを回まわす。カチューシャのように縦たてに

「どうかな？」頬ほおを染そめて、上うわ目め遣づかいで俺おれに訊きく。組くみ紐ひもがリボンのようにならぶ。「あー……」

あんま似に合あってねえな、と俺おれは思おもう。なんかちょっとガキっぽいっていうか。だいたい、そういうことを、俺おれは一いっ瞬しゅん考かんがえる。いやしかしこういう場ば合あいはとりあえず褒ほむ。「……まあ、悪わるくないな」

「……なっ！」三みつ葉はの表ひょう情じょうがさっと曇くもる。あれ？

「あんた、似に合あつとらんって思おもってるでしょ！」

「ええ！」なんでバレるんだ!!

「は、はは……すまん」

「もう……この男おとこは！」

心しん底そこ呆あきれたという顔かおで、ぷいと横よこを向むいてしまう。なんだこれ。女じょ子しとのと、ぷっと三みつ葉はは吹ふき出だす。お腹なかを抱かかえ、くすぐすと笑わらい出だす。なんなんだこ

すこしづつ、気き温おんが下さがっていく。すこしづつ、光ひかりが褪あせていく。

「なあ三みつ葉は」

放ほう課か後ごにさんざん遊あそんで、まだまだずっと一いっ緒しょにいたいのに、そろそろ家いえに帰る。「まだ、やることがある。聞きいて」

テシガワラとサヤちんとの計けい画かくを、俺おれは説せつ明めいする。真しん剣けんにうなずきながら「来きた……」

三みつ葉はが空そらを見みて、かすかに震ふるえた声こえで呟つぶやく。視し線せんを追おうと、濃のう「大だい丈じょう夫ぶ、まだ間に合あう」俺おれは自じ分ぶんに言いい聞きかせるように、強つよく言い

「うん、やってみる。……あ、カタワレ時どきが、もう——」

そう喋しゃべる三みつ葉はも、いつの間にか淡あわい影かげ色いろになっている。

「——もう、終おわる」俺おれも言いう。空そらからは、夕ゆう陽ひの名残なごりがほとんど消きえつつある。「目めが覚さめてもお互たがい忘わすれないようにさ」俺おれはポケットからサインペンを取り出だす。「名な前まえ書かいておこうぜ。ほら」

そう言いって、今こん度どは三みつ葉はの手てにペンを持もたせる。

「……うん！」

花はなが咲さくみたいに、三みつ葉はがぱっと笑え顔がおになる。俺おれの右みぎ手てを持もち、ペン先かつん。

足あし元もとで、硬かたく小ちいさな音おとがした。

下したを見みると、ペンが地じ面めんに落おちている。

「え？」俺おれは顔かおを上あげる。

目めの前まえには、誰だれもいない。

「え……？」

周しゅう囲いを見み回まわす。

「三みつ葉は？　おい、三みつ葉は？」

俺おれは声こえを上あげる。返へん事じはない。慌あわてて周しゅう囲いを歩あるき回まわる。景色けし
三みつ葉はは消きえた。

夜よるが来きたのだ。

三年ねん後ごの自じ分ぶんの体からだに、俺おれは戻もどっている。

俺おれは右みぎ手てを見みる。手て首くびの組くみ紐ひもは、もうない。手てのひらには、書かきかけの
「……言いおうと思おもったんだ」

俺おれはその線せんに向むかって、小ちいさく独ひとりごちる。

「お前まえが世せ界かいのどこにいても、俺おれが必かならず、もう一いち度ど逢あいに行いくって」

空そらを見み上あげる。彗すい星せいの姿すがたはどこにもなく、いくつか星ほしが瞬またたきはじめて
「——君きみの名な前まえは、三みつ葉は」

記き憶おくを確かく認にんするように、確たしかなものにするように、俺おれは目めをつむる。

「……大だい丈じょう夫ぶ、覚おぼえてる！」

自じ信しんを深ふかめて、目めを開ひらく。白しろい半はん月げつが遠とおい空そらにある。

「三みつ葉は、三みつ葉は……。三みつ葉は、みつは、みつは。名な前まえはみつは！」

半はん月げつに彼女かのじょの名なを、俺おれは叫さけんでいる。

「君きみの名な前まえは……！」

ふいに、言いおうとした言こと葉ばの輪りん郭かくが、ぼやける。

俺おれは慌あわててペンを拾ひろう。名な前まえの最さい初しょの一ひと文も字じを、手てのひらに書か
「……！」

でも線せん一本ぽんを引ひいたところで、俺おれの手ては止とまってしまう。ペン先さきが震ふるえはじ
「……お前まえは、誰だれだ？」

俺おれの手てから、ペンが落おちる。

消きていく。君きみの名な前まえが。君きみの記き憶おくが。

「……俺おれは、どうしてここに來きた？」

俺おれはそれをどうにか繋つなぎとめたくて、記き憶おくのかけらをなんとか書き集あつめたくて、声こ
「あいつに……あいつに逢あうために来きた！ 助たすけるために来きた！ 生いきていて欲ほしかった！」
消きえていく。あんなにも大たい切せつだったものが、消きえていく。
「誰だれだ？ 誰だれだ、誰だれだ、誰だれだ……？」
こぼれ落おちていく。あったはずの感かん情じょうまでが、なくなっていく。
「大だい事じな人ひと、忘わすれちゃだめな人ひと、忘わすれたくなかった人ひと！」
悲かなしさも愛いとおしさも、すべて等ひとしく消きえていく。なぜ自じ分ぶんが泣ないでいるのかも、
「誰だれだ、誰だれだ、誰だれだ……」
砂すなが崩くずれた後あとに、しかし一つだけ消きえない塊かたまりがある。これは寂さびしさだと、俺
——いいだろう。ふと俺おれは、強つよくつよく思おもう。世せ界かいがこれほどまでに酷ひどい場ば所
「君きみの、名な前まえは？」
その声こえは、こだまとなって夜よるの山やまに響ひびく。虚こ空くうに繰くり返かえし問といかけなが

やがて、無む音おんが降おりてくる。



私わたしは走はしる。

暗くらい獣けもの道みちを、彼かれの名な前まえを繰くり返かえしながら、ひたすらに走はしる。

瀧たきくん、瀧たきくん、瀧たきくん。

——大だい丈じょう夫ぶ、覚おぼえてる。ぜったいに忘わすれない。

やがて木き々ぎの隙すき間に、糸いと守もり町まちの明あかりがちらちらと見みえはじめる。風かぜに瀧たきくん、瀧たきくん、瀧たきくん。

空そらを見み上あげると、長ながく尾おを引ひくティアマト彗すい星せいが月つきよりも明あかるく輝か
君きみの名な前まえは、瀧たきくん!

原げん付つきバイクの音おとに顔かおを上あげると、坂さかを登のぼってきたヘッドライトが目めを射う
「テッシー！」私わたしは声こえを上あげて原げん付つきに駆かけ寄よる。
「三みつ葉は！　お前まえ、今いままでどこにおったんや!?」
叱しかりつけるような声こえ。とても説せつ明めいできない。学がくラン姿すがたで袖そでをまくり上あ
「自じ転てん車しゃ壊こわしちゃって、ごめんやって」
「はあ？　誰だれが？」
「私わたしが！」
テッシーは眉まゆをひそめ、でも無む言ごんのまま原げん付つきのエンジンを切きりヘルメットのライト

糸いと守もり変へん電でん所しょ・社しゃ有ゆう地ちにつき立たち入りり禁きん止し。金かな網あみには
「落おちるんか？　あれが。マジで!？」
空そらを見み上あげて、テッシーが私わたしにそう訊きく。私わたしたちは変へん電でん所しょの金かな
「落おちる！　この目めで見みたの！」
私わたしはテッシーの目めをまっすぐに見みて言いう。落らっ下かまであと二時じ間かん。説せつ明めい
「見みたってか！　じゃあ、やるしかないなあ！」
そう言いってテッシーが勢いきおいよくスポーツバッグを開あけると、茶ちゃ色いろい紙かみに包つつま
「これ以い上じょうやったら、いたずらじや通とおらんぞ」
「お願ねがい。責せき任にんはぜんぶ、私わたしにあるで」
「あほか！　そんなこと訊きいてんじやねえわ」
怒おこったようにそう言いって、テッシーはなぜかちょっと赤あかくなる。
「これで、二人ふたり仲なか良よく犯はん罪ざい者しゃや！」
暗くら闇やみを破やぶくみたいに、鎖くさりが切せつ断だんされる音おとが大おおきく響ひびく。

「町まちが停てい電でんしたら、学がく校こうはすぐに非ひ常じょう用よう電でん源げんに切きり替かわる
スマフォに向むかって、テッシーが叫さけんでいる。テッシーは原げん付つきを運うん転てんしていく、
「三みつ葉は、サヤちんが代かわってくれやと」
「もしもし、サヤちん！」私わたしはスマフォを自じ分ぶんの耳みみに当あてる。
「え～ん、三みつ葉はあ～！」

サヤさんは涙なみだ声ごえだ。

「ねえちょっと、私わたし、ほんとにやらないかんのぉ!?」

不ふ安あんげな声こえに、ずきんと胸むねが痛いたむ。私わたしだって、サヤさんの立たち場ばだったら
「サヤちんごめん、でも、お願ねがいやから！」

今いまの私わたしには、これしか言いえない。

「一いっ生しょうのお願ねがいやから！ 私わたしたちがこれをしないと、たくさんの人ひとが死しぬんよ
返へん事じがない。受じゅ話わ器きからくぐもって聞きこえるのは、鼻はなをすする小ちいさな音おとだ
「サヤちん？ ねえ、サヤちん！」

私わたしは不ふ安あんになる。ふいに、よしっ、という声こえが小ちいさく聞きこえる。

「ええい、もうヤケや！ テッサーに、あんたもおごれって言いっといて！」

「サヤちん、なんやって？」

私わたしはスマフォをスカートのポケットにしまいながら、原げん付つきのエンジン音おんに負けない
「あんたもおごれやって」

「おっしゃあ、やったれやあ！」

なにかを上うわ書がきするような勢いきおいでテッサーが叫さけんだ瞬しゅん間かん、花はな火びの大お
原げん付つきを停とめ、私わたしたちは振ふり返かえる。二つ、三つ。また一つ。破は裂れつ音おんが連
「テッサー……！」

私わたしの声こえが、震ふるえている。

「ははっ！」

笑わらいに聞きこえるテッサーの息いきも、震ふるえている。

と、ひとりわ大おおきな爆ばく発はつ音おんがして、町まち中じゅうの明あかりが、ふいに消きえた。

おい、と、なんだかぼんやりした声こえでテッサーが言いう。停てい電でんやね、と、そのまんまを私わ
やったのだ。私わたしたちが。

突とつ然ぜん、湧わきあがるようにしてサイレンが鳴なりはじめた。

ウウウウウウウウウウ……………！

町まち中じゅうのスピーカーから、耳みみをつんざく暴ぼう力りょく的てきな音おん量りょうでそれは響
サヤちんだ。防ぼう災さい無む線せんを、乗のっ取とったんだ。

私わたしたちは無む言ごんでうなづきあって、また原げん付つきにまたがる。神じん社じやに向むかって

『こちらは、町まち役やく場ばです。糸いと守もり変へん電でん所しょで、爆ばく発はつ事じ故こが発はつ

テッシーの原げん付つきは県けん道どうを逸それ、細ほそい山やま道みちを登のぼっていく。神じん社じ



『次つぎの地ち域いきの人ひとは、いますぐ、糸いと守もり高こう校こうまで避ひ難なんしてください。門

「いよいよや。いくぞ三みつ葉は！」

「うん！」私わたしたちは原げん付つきから飛とび降おりる。神じん社じやの裏うら山やま、その斜しゃ面

『繰くり返かえします。こちらは、糸いと守もり町まち役やく場ばです。糸いと守もり変へん電でん所しょ』

階かい段だんを下おりきると、そこは本ほん殿でんの裏うら手てだ。すぐそこには祭まつり会かい場じよ
「逃にげろー！　山やま火か事じになっとる、ここは危き険けんやあ！」

テッサーの声こえは、まるでメガホンを通とおしたみたいにばかでかい。私わたしも負まけないように大
「ええ、ほんとに山やま火か事じやって！」「なあ逃にげようよ」「高こう校こうまで歩あるくの？」

もともと防ぼう災さい無む線せんで出で来きていた避ひ難なんの流ながれが、私わたしたちの大おお声ご
「三みつ葉は！」

鋭するどく名な前まえを呼よばれて、私わたしはテッサーを見み上あげる。

「こりゃヤベえぞ！」

テッサーの視し線せんを追おってあたりをよく見みると、屋や台たいの脇わきにのんびりと座すわり込こ
「山やま火か事じがマジで迫せまりでもしんと、こいつら全ぜん員いんはとても動うごかせん！　消しょう」

テッサーの焦あせった声こえがすぐ頭あたまの上うえから、でも、やけに遠とおく聞きこえる。……あの
「おい、三みつ葉は……どうした？」

「……テッサー、ねえ、どうしよう……？」

なにも考かんがえることができず、私わたしは気きづけばテッサーに訴うったえている。

「あの人ひとの名な前まえが……思おもい出だせんの！」

テッサーの顔かおが、心しん配ぱいげに歪ゆがむ。と、突とつ然ぜん、
「知しるか、あほう！」と怒ど鳴なりつけられた。

「周まわりを見みろや！　これはぜんぶ、お前まえが始はじめたことや！」心しん底そこ腹はらが立たつ、
頬ほおを張はられたように、私わたしの背せ筋すじが伸のびる。

「……うん！」

精せい一いっ杯ぱいの強つよさで私わたしはうなずき、振ふり切きるように、駆かけ出だす。背せ中なか
これはぜんぶお前まえが始はじめたことや、テッサーはそう言いった。そうだ、これは私わたしが、私た

*

*

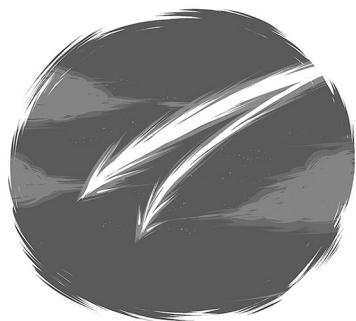
*

それは秋あきのはじめで、俺おれはまだ、中ちゅう学がく生せいだった。
父とうさんと二人ふたりきりの生せい活かつにもやっと慣なれてきた頃ころで、二人ふたりで苦く労ろう
その日ひのテレビは、彗すい星せいの最さい接せっ近きんのニュースを持もちきりだった。俺おれは星ほ
『ご覧らんください！』
突とつ然ぜんに興こう奮ふんした声こえで、実じっ況きょう中ちゅうのアナウンサーが叫さけんだ。
『彗すい星せいが二つに分ぶん裂れつしたように見みえます。その周しゅう囲いには……無む数すうの流りゆう
カメラがズームすると、東とう京きょうの高こう層そうビルを背はい景けいに、たしかに彗すい星せいが

* * *

防ぼう災さい無む線せんの放ほう送そうに、突とつ然ぜん、ガチャリ、と扉とびらが開ひらく音おとが混
きやっ、とサヤちんの短みじかい悲ひ鳴めいが聞きこえ、続づいて聞きき覚おぼえのある男だん性せい
『お前まえ、なにしとるんや！』『早はやく切きりなさい！』
ガタガタと椅い子すが倒たおれるような音おとがあり、それからキンと短みじかいハウリングを残のこ
「サヤちん……！」私わたしは立たち止どまり、思おもわず声こえを上あげた。
先せん生せいに、見みつかったんだ。大おお粒つぶの汗あせが思おもい出だしたみたいに噴ふき出だして
まずい、と思おもったとたん、防ぼう災さい無む線せんからふたたび声こえが流ながれた。
『こちらは、糸いと守もり町まち役やく場ばです』
サヤちんでも、サヤちんお姉ねえさんでもない。これも時とき々どき聞きいたことのある、役やく場ばの
『ただいま、事じ故こ状じょう況きょうを確かく認にんしています。町ちょう民みんの皆みなさまは、慌あ
弾はじかれるように、私わたしはまた駆かけ出だす。』
無む線せんの発はっ信しん元もとがバレて、役やく場ばから学がっ校こうに連れん絡らくが行いったんだ
『繰くり返かえします。慌あわてず、その場ばで待たい機きして、指し示じをお待まちください』
待たい機きじゃだめだよ！ こんな放ほう送そう、やめさせなくちゃ！
私わたしは県けん道どうから逸それで、アスファルトの隙すき間まからやぶの茂しげった斜しゃ面めんに
ようやく斜しゃ面めんを下くだりきり、私わたしはふたたびアスファルトに駆かけ出でる。周しゅう囲い
「……え!?」
違い和わ感かんにふと目めを向むける。湖みずうみが、淡あわく光ひかっている。私わたしは走はしった
違ちがう、水みずが光ひかってるんじゃなくて、凧ないだ水すい面めんが空そらを映うつしてるんだ。ま

——ああ、とうとう彗すい星せいが、
「.....割われとる！」



* * *

俺おれはテレビのチャンネルを次つぎ々つぎと切り替かえる。どの局きょくでも、突とつ如じょ発はつ
『たしかに、彗すい星せいが二つに分ぶん裂数れつしています』

『これは事じ前ぜんの予よ想そうにはありませんでしたね』
『しかし、これは非ひ常じょうに幻げん想そう的てきな眺ながめです……』
『彗すい星せいの核かくが割われた、と断だん定ていして良よいのでしょうか』
『潮ちよう汐せき力りょく、ロシュ限げん界かいは超こえていないはずですから、考かんがえられるのは彗すい星せい』
『まだ国こく立りつ天てん文もん台だいからの発はっ表ぴょうはありませんが……』
『似にたような事じ例れいでは一九九四年ねんのシーメーカー・レヴィ彗すい星せいが木もく星せいに落とす危き険けん性せいはないんでしょうか?』
『彗すい星せいは氷こおりの塊かたまりですから、おそらく地ち表ひょうに到とう達たつする前まえに融ゆる』
『リアルタイムでの破は片へんの軌き道どう予よ測そくは困こん難なんで——』
『これほど壮そう麗れいな天てん体たい現げん象じょうを目もく撃げきしていること、また、日に本ほんが

「俺おれ、ちょっと見みてくる！」

思おもわず椅い子すから立たち上あがり、父とうさんにそう言ひってマンションの階かい段だんを駆かけ近きん所じょの高たか台だいで、夜よ空ぞらを見み上あげた。

無む数すうのきらめく光ひかりが——まるで空そらにもうひとつ東とう京きょうが覆おおい被かぶさつ

* * *

二つに割われた彗すい星せいが、停てい電でんの町まちを迷まい子ごのように一人ひとりで走はしっていい——誰だれ、誰だれ。あの人ひとは誰だれ?

彗すい星せいから目めを離はなせぬまま、落おち続つづけるように走はしり続つづけながら、私わたしは——大だい事じな人ひと。忘わすれちゃだめな人ひと。忘わすれたくなかった人ひと。

町まち役やく場ばまでは、あとすこし。あの彗すい星せいが隕いん石せきとなって落おちてくるまで、あ——誰だれ、誰だれ。きみは誰だれ?

最さい後ごの力ちからをふりしぶる。私わたしはスピードを上あげる。

——君きみの、名な前まえは?

きゃっ! と、思おもわず声こえが出でた。

爪つま先さきがアスファルトのくぼみにはまり、転ころぶ、と思おもった瞬しゅん間かんには、もう地じ

.....

.....

.....でも。

君きみの声こえは、耳みみに届とどく。

「目めが覚さめてもお互たがい忘わすれないようにさ」

あの時とき君きみはそう言いって、

「名な前まえ書かいておこうぜ」

私わたしの手てに書かいたんだ。

倒たおれたまま、私わたしは目めを開ひらく。

ずきんずきんとにじむ視し界かいに、私わたしの握にぎった右みぎ手てがある。指ゆびを開ひらく。開ひ
なにか、文も字じがある。目めを凝こらす。

すきだ

息いきが、一いっ瞬しゅんとまる。私わたしは立たち上あがろうとする。力ちからがうまく入はいらなく
.....これじゃあ、と私わたしは思おもう。涙なみだが溢あふれて、視し界かいがまたにじむ。涙なみだと
これじゃあ、名な前まえ、分わかんないよ——。

そしてもう一いち度ど、全ぜん力りょくで、走はしり出だす。

もうなにも怖こわくない。もう誰だれも恐おそれない。もう私わたしは寂さびしくない。

やっとわかったから。

私わたしは恋こいをしている。私わたしたちは恋こいをしている。

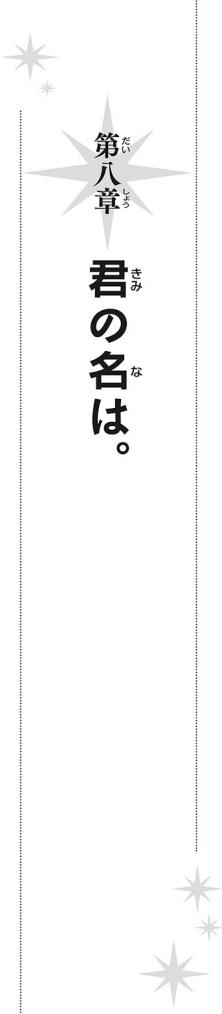
だから私わたしたちは、ぜったいにまた出で逢あう。
だから生いきる。
私わたしは生いき抜ぬく。
たとえなにが起おきても、たとえ星ほしが落おちたって、私わたしは生いきる。

* * *

彗すい星せいの核かくが近きん地ち点てんで碎くだけることも、氷こおりで覆おおわれたその内ない部ぶ
町まちは、その日ひがちょうど秋あき祭まつりだったそうだ。落らっ下か時じ刻こくは二十時じ四十二分
隕いん石せき落らっ下かにより、神じん社じやを中ちゅう心しんとした広こう範はん囲いが瞬しゅん時じ

ひょうたん型がたの新しん糸いと守もり湖こを眼がん下かに見みながら、俺おれはそんなことを思おもい
岩いわだらけの山さん頂ちょうに一人ひとりきりで、俺おれは立たっている。
目めが覚さめたら、ここにいたのだ。
ふと、俺おれは右みぎ手てを見みる。手てのひらに、書かきかけのような一本ぽんの線せんがある。
「なんだ、これ……？」
俺おれは小ちいさくつぶやく。

「俺おれ、こんな場ば所しょで、なにしてたんだ？」



知しらぬ間に身みについてしまった癖くせがある。

たとえば、焦あせった時ときに首くびの後うしろ側がわを触さわること。顔かおを洗あらう時とき、鏡かそれから、手てのひらを意い味みもなく見みつめること。

次つぎは・代よ々よ木ぎ・よよぎー。

合ごう成せい音おん声せいがそう告つげて、俺おれはまた、自じ分ぶんがそうしていたことに気きづく。

突とつ然ぜん、全ぜん身しんが総そう毛け立だった。

すこし遅おくれて、彼女かのじょだ、と思おもった。

ホームに彼女かのじょが立たっていた。

停てい車しゃし、ドアが開ひらききるのももどかしく、俺おれは電でん車しゃから駆かけ出だす。体から別べつに探さがしている人ひとなんて誰だれもいないのだ。「彼女かのじょ」とは、誰だれでもない。これも知しらぬ間に身みについてしまった、たぶん、妙みような癖くせだ。

気きづけばふたたび、俺おれはホームに立たったままで手てのひらを見みつめている。そして、あとすこもうすこしだけいい。あとすこしだけいいから。

その先さきの望のぞみがわからぬまま、でも俺おれは、いつからかなにかを願ねがっている。

「御おん社しゃを志し望ぼういたしました理り由ゆうは、私わたしが建たて物ものを——いえ、というか街目めの前まえの面めん接せつ官かん四人にんの顔かおが、かすかに曇くもった。いやいや気きのせいだ、「昔むかしから、そうでした。自じ分ぶんでも理り由ゆうはよくわからないんですが、あの……とにかく好——なるほど」と、面めん接せつ官かんの一人ひとりが柔やわらかくせき止とめるように言いう。「では、そう訊きいてきたのは四人にんの中なかでも唯ゆい一いつ優やさしそうに見みえた中ちゅう年ねん女じよ「それは……バイトの接せつ客きゃくも楽たのしかったんですけど、もっと大おおきなものに閑かかわりたいもっと大おおきなもの?」これじゃ中ちゅう学がく生せいの回かい答とうだ。顔かおが赤あかくなつてしまつり……、東とう京きょうだって、いつ消きえてしまうか分わからんと思おもうんです」

面めん接せつ官かんたちの表ひょう情じょうが今こん度どこそ、はっきりと曇くもる。首くびの後うしろ「だからたとえ消きえてしまっても、いえ、消きえてしまうからこそ、記き憶おくの中なかでも人ひとをああ、だめだ。自じ分ぶんで言いっていて意い味み不ふ明めいだ。ここもまた落おちた。面めん接せつ官

「で、面めん接せつ、今日きょうで何なん社しゃ目め?」と高たか木ぎに訊きかれ、「数かぞえてねえよ」と、俺おれは憮ぶ然ぜんと答こたえる。

司つかさがやけに楽たのしそうに「受うかる気きがしないな」と言いい、「お前まえが言いうな!」と不「スーツが似に合あわなすぎだからじゃね?」ニッと笑わらって高たか木ぎが言いう。

「お前まえらだって似にたようなモンじゃねえか!」と俺おれは気け色しきばむ。

「俺おれ、内ない定てい二社しゃ」と楽たのしそうに高たか木ぎが言いい、

「俺おれ、八社しゃ」と見み下くだしたように司つかさが言いう。

「くっ……!」

返かえす言こと葉ばがない。コーヒーカップが、屈くつ辱じょくに震ふるえる手ての先さきでカチカチとびろりん。

テーブルに置おいたスマフォが音おとを立たてた。俺おれはメッセージをチェックし、残のこったコーヒー。
そういえば高こう校こう時じ代だい、このカフェには三人にんでよく来きたな。ふとそう思おもい出だし
……いや、それは少しょう女じょに対たいしての慣かん用よう句くだったか。そんなことをぼんやりと考

「おっ。就しゅう活かつ中ちゅうだねえ」

スマフォから顔かおを上あげて俺おれのスーツ姿すがたを見み、奥おく寺でら先せん輩ぱいは笑わらって
「はは。まあ、だいぶ手てこずりますけど」

俺おれの言こと葉ばを聞きいて、先せん輩ぱいは「うーん」と唸うなって俺おれに顔かおを近ちかづける
「スーツが似に合あってないからじゃない？」

「そつ……そんなに似に合あってないですか!?」

俺おれは思おもわず自じ分ぶんの体からだを見みおろす。

「やだなー、冗じょう談だんだよっ！」

ころりと切きり替かわるように、満まん面めんの笑えみで先せん輩ぱいが言いう。

ちょっと歩あるこうよという先せん輩ぱいに付つき合あって、俺おれたちは新しん宿じゅく通どおりを大
「今日きょうはどうしたんですか、急きゅうにメールなんて」

俺おれだけ季き節せつに乗のり遅おくれてるなと思おもいながら、隣となりを歩あるく先せん輩ぱいに訊
「なによ」グロスの唇くちびるを先せん輩ぱいは尖とがらせる。「用ようがなくちゃ連れん絡らくしちゃい
「いやいやいや！」俺おれは慌あわてて手てを振ふる。

「久ひさしぶりに私わたしに会あえて嬉うれしいでしょう？」

「あ、はい、嬉うれしいっす」

俺おれの返へん事じに満まん足ぞくそうな笑え顔がおを見みせて、先せん輩ぱいは言いう。

「仕し事ごとでこっちまで來きたから、ちょっと瀧たきくんの顔かおでも見みておこうと思おもってね」
大おお手てアパレルチェーンに勤つとめる先せん輩ぱいは、今いまは千ち葉ばにある支し店てんで働はた
ねえ見みて、とふいに言いわれ、俺おれは顔かおを上あげた。

歩ほ道どう橋きょうを渡わたる俺おれたちの目めの高たかさに、家か電でん量りょう販はん店てんの街が
「私わたしたち、いつか糸いと守もりまで行いったことあったよね？」

遠とおい記き憶おくを探さぐるように目めを細ほそめて、先せん輩ぱいが言いう。

「あれって、瀧たきくんがまだ高こう校こう生せいだったから……」

「五年ねん前まえ、かな」と俺おれは言こと葉ばを継つぐ。

「そんなに……」先せん輩ぱいは驚おどろいたように小ちいさく息いきをはく。「なんだか、いろいろと忘
そうなんだよな、と俺おれも思おもう。歩ほ道どう橋きょうを降おり、赤あか坂さか御ご用よう地ちに沿
高こう校こう二年ねんの夏なつ——いや、あれはちょうど今いま頃ごろの季き節せつ、秋あきのはじめだ
そうだ——。あの時じ期き、俺おれは彗すい星せいをめぐって起おきたあの一いち連れんの出で来き事ご
彗すい星せいの破は片へんが一つの町まちを破は壊かいした、人じん類るい史し上じょうまれに見みる自
あまりの偶ぐう然ぜんと幸こう運うんに、災さい害がい後ごは様さま々ざまな噂うわさが囁ささやかれた
それにしても——と俺おれはあらためて妙みょうに思おもう。糸いと守もり町まちのスケッチ画がまで、
まあ、今いまさらいいか。外そと堀ぼり通どおり沿ぞいの高たか台だいから、夕ゆう闇やみに沈しづみつ
風かぜが出でてきたね、と囁ささやくように先せん輩ぱいが言いい、彼女かのじょのウェーブがかかった長

「今日きょうは付つきあってくれてありがとう。ここまででいいよ」

学がく生せい時じ代だいにバイトをしていたイタリアンレストランで二人ふたりで夕ゆう食しょくを食た
「それにしても私わたしたちのバイト先さきて、あんなに美味おいしいお店みせだったんだね」

「バイトの時ときの賄まかない、給きゅう食しょくみたいなもんばっかでしたもんね」

「何なん年ねんも気きづかなかったよね」

俺おれたちは笑わらう。先せん輩ぱいが気き持もちよさそうに息いきを深ふかく吸すい、じゃあまたね、



君きみもいつか、ちゃんと、しあわせになりなさい。

私わたし結けっ婚こんするの、とエスプレッソを飲のみながら告つげた先せん輩ぱいは、その後あとで俺
俺おれは別べつに、ふしあわせじゃない。歩ほ道どう橋きょうの階かい段だんを降おりていく先せん輩ぱ
ふと、手てのひらを俺おれは見みる。不ふ在ざいだけが、そこには載のっている。
もうすこしだけ——、と俺おれはまた思おもう。

気きづけば、また季き節せつが変かわっていた。

やけに台たい風ふうの多おおい秋あきが過すぎ、そこからなんの区く切ぎりもなく、冷つめたい雨あめば

俺おれは雑ざつ念ねんを飲み込こむように紙かみカップのコーヒーを一ひと口くち飲のみ、あらためてOB訪ほう問もん、説せつ明めい会かい、エントリー締しめ切きり、ペーパー日につ程てい、面めん接せ——やっぱりもう一回かい、ブライダルフェア行いと書きたいなあ。

雨あめの音おとと混まじると、知しらない人ひとの会かい話わまでがなんだか秘ひ密みつめいて聞きこえ「もう一回かい？」うんざりしたように、でも声こえににじむ親しん愛あいは隠かくしようもなく、男おと「いやなんかね、やっぱ神しん前ぜん式しきもいいかなって」

「お前まえ、チャペルが夢ゆめだって言いとったに」

「だって一いっ生しょうに一度どのことやもん、そんな簡かん単たんに決きめられんもん」

でも決きめたって言いとったよ、と男おとこが小ちいさく抗こう議ぎし、俺おれはくすりとする。女お「それよりテッシーさあ、式しきまでにヒゲ剃そってよね」

コーヒーを飲のもうとした俺おれの手てが、ぴたりと止とまる。

自じ分ぶんでも理り由ゆうが分わからぬまま、鼓こ動どうが速はやくなっていく。

「私わたしも三キロ瘦やせてあげるでさ」

「お前まえ、ケーキ喰くいながらそれ言いうかあ？」

「明日あしたから本ほん気き出だすの！」

ゆっくりと、俺おれは後うしろを見みる。

二人ふたりはすでに席せきから立たち上あがり、コートに袖そでを通とおしているところだ。ひょろりと

店みせを出でる頃ころには、雨あめは雪ゆきに変わっていた。

大たい気きにたっぷりと満みちた湿しつけのおかげか、雪ゆきの舞まう街まちは妙みょうに暖あたたかその足あしで、閉へい館かん間ま際ぎわの区く立りつ図と書しょ館かんに入はいった。吹ふき抜ぬけの広古ふるい封ふう印いんをとくように、俺おれは一ページ一ページをゆっくりとめくっていく。

銀杏いちょうの木きと小しょう学がっ校こう。湖みずうみを見みおろす、神じん社じやの急きゅうな階かそれは日に本ほんのどこにでもある平へい凡ぼんな風ふう景けいで、だからそのすべてに見み覚おぼえがなぜこんなにも、と俺おれは思おもう。思おもいながらページをめくる。

今いまはもう存そん在ざいしない町まちのあたりまえの風ふう景けいに、なぜこんなにも、俺おれの心こ

*

*

*

かつてとても強つよい気き持もちで、俺おれはなにかを決けっ心しんしたことがある。
帰かえり道みちに誰だれかの窓まど灯あかりを見み上あげながら、コンビニで弁べん当とうに手てを伸の
俺おれはかつて、なにかを決きめたのだ。誰だれかと出で逢あって、いや、誰だれかと出で逢あうために
顔かおを洗あらって鏡かがみを見みつめながら、ゴミ出だし場ばにビニール袋ぶくろを置おきながら、ビ
誰かとかなにかとか、結けっ局きょくなにも分わかつてねえじゃねえか。
面めん接せつ会かい場じょうの扉とびらを閉しめながら、でも、と俺おれは思おもう。
でも、俺おれは今いまももがいでいる。大おお袈げ裟さな言いい方かたをしてしまえば、人じん生せいに
あとすこしだけでいい、と俺おれは思おもう。
あとすこしでいい。もうすこしだけでいい。
なにを求もとめているのかもわからず、でも、俺おれはなにかを願ねがい続つづけている。
あとすこしだけでいい。もうすこしだけでいい。
桜さくらが咲さいて散ぢり、長ながい雨あめが街まちを洗あらい、白しろい雲くもが高たかく湧わきあが
日ひ々びは加か速そくしていく。
俺おれは大だい学がくを卒そつ業ぎょうし、なんとか手てにした就しゅう職しょく先さきで働はたらいて
朝あさ、目めを覚さまし、右みぎ手てをじっと見みる。人ひと差さし指ゆびに、小ちいさな水すい滴てき
あとすこしだけでいいから——、そう思おもいながら、俺おれはベッドから降おりる。

あとすこしだけでいいから。

私わたしはそう願ねがいながら、鏡かがみに向むかって髪かみ紐ひもを結ゆう。春はる物もののスーツに

俺おれは電でん車しゃのドアに寄よりかかり、外そとを見みる。ビルの窓まどにも、車くるまにも、歩ほ
その瞬しゅん間かん、なんの前まえ触ぶれもなく、俺おれは出で逢あう。

とつぜんに、私わたしは出で逢あう。

窓まどガラスを挟はさんで手てが届とどくほどの距きょ離り、併へい走そうする電でん車しゃの中なかに

ほんの一メートルほど先さきに、彼女かのじょがいる。名な前まえも知しらない人ひとなのに、彼女かの
でも俺おれは、自じ分ぶんの願ねがいをようやく知しる。

あとすこしだけでも、一いっ緒しょにいたかった。

もうすこしだけでも、一いっ緒しょにいたい。

停てい車しゃした電でん車しゃから駆かけだし、俺おれは街まちを走はしっている。彼女かのじょの姿す
俺おれたちはかつて出で逢あったことがある。いや、それは気きのせいかもしれない。夢ゆめみたいな思

坂さか道みちを駆かけながら、私わたしは思おもう。どうして私わたしは走はしっているのだろう。どう

走はしり出だしたいのをこらえて、俺おれはゆっくりと階かい段だんを登のぼり始はじめる。花はなの匂

私わたしたちは目めを伏ふせたまま近ちかづいていく。彼かれはなにも言いわざ、私わたしもなにも言い

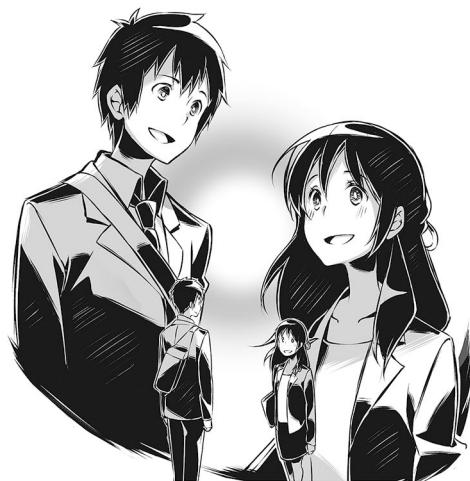
だから、俺おれは振ふり向むく。まったく同おなじ速そく度どで、彼女かのじょも俺おれを見みる。東と

やっと逢あえた。やっと出で逢あえた。このままじゃ泣なき出だてしまいそう、そう思おもったところ

そして俺おれたちは、同どう時じに口くちを開ひらく。

いっせーの一でとタイミングをとりあう子こどもみたいに、私わたしたちは声こえをそろえる。

——君きみの、名な前まえは、と。



初しょ出しゅつ

本ほん書しょは『小しょう説せつ君きみの名なは。』（角かど川かわ文ぶん庫こ 二〇一六年ねん六月がつ
新海誠／作

1973年長野県生まれ。アニメーション監督。2002年、ほぼ1人で制作した短編アニメーション『ほ
秒速5センチメートル』『小説 言の葉の庭』も高く評価された。

「君の名は。」製作委員会／カバー絵

ちーこ／挿絵

千葉県在住。イラストレーター、デザイナー。可愛いものとレトロなものが大好きなうさぎさん派。

装丁 ムシカゴグラフィクス

君きみの名なは。

作さく 新しん海かい 誠まこと

カバー絵え 「君きみの名なは。」製せい作さく委い員いん会かい

挿さし絵え ちーこ

角川つばさ文庫

2016年8月15日 発行

(C)Makoto Shinkai/2016 「君の名は。」製作委員会

(C)Chi-ko 2016

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川つばさ文庫『君の名は。』

2016年8月15日初版発行

発行者 郡司 智

発行 株式会社KADOKAWA

〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3

電話 0570-002-301 (カスタマーサポート・ナビダイヤル)

受付時間 9:00~17:00 (土日 祝日 年末年始を除く)

<http://www.kadokawa.co.jp/>